127
6
307

大日本復雅言美談

阿波曽村をて
夫隅藏人

大和郡山仇討

版權所有
東京屋梓

特13/298
WC12142

叙

妊娠の婦人切れて其胎内より産れたる子の仇を報じたるハ彼の覗機關に名を知られ兒童の耳目に最聞たる小夜中山夜泣石の由來なり又石井常右衛門の娘すての傳も大同小異にして兩人あから觀音隊陀の靈驗を以て言り然るに夜泣石の由來ハ同所の觀音縁起ゑ載且戯作の書に見るのこと阿波曽村すての話しと寶記と爲る物に在も却て夜泣石の方名高き故は恐らくは石井より出たる物語あゑんか今に到つて判然すると能はざるも編者先生が筆を大和郡山迄走たるは此仇討に賛成なしたるにや有ん

大柳白山人識

本外史

阿波曾根村すて
大隅藏人

大和郡山仇討總目錄

第一章　身落魄して途に舊知ふ遇ふ　幷禍因を去んとして芳原ふ佳人を訪ふ
第二章　恥を花柳ふ與んとして却て辱を受　幷義に仗て怨を雪ぎ意情遂に濃也
第三章　奸人を殺害して身羈旅の客となる　幷黨賊金を奪ふて善化を發念す
第四章　士人志を屈して農穿に緣を結ぶ　幷身上を說て反て一生の訣を索む
第五章　愛情を斷念して夜家を脫す　幷貞女夫を慕て大に路に病む
第六章　貞女路に害されて胎兒を分娩す　幷慈人赤子を拾ふて紳意の顯著を感ず
第七章　圖らず再會して舊惡を謝す　幷幼女身上を知ずして兒童に嬲らる
第八章　始て身上を知て幼女復讎の念を生ず　幷寡婦慈情ふ逃ふて幼女を泥放つ
第九章　幼女心を決して四方ふ廻國す　幷再び恩人を得て復讎の念念ふ切なり
第十章　姦賊酒に醉ふて舊惡を語る　幷仇敵ふ遭ひ實父に遇ふて悟び大なり
第十一章　仇討場所成て威儀整然さり　幷幼女敵ふ對つて諸人肝を寒からしむ
第十二章　復讎既に遂て領主之を賞す　幷兩人恩遇を辭して身浮屠に歸す

總目錄終

阿波曾根村すて
大隅藏人

大和郡山讐討

第一章　身落魄して途に舊知に遇ふ　禍因を去として芳原に佳人を訪ふ

德川四代の將軍家綱公の時ふ當り平安の人に石井吉兵衛と喚者あり資性頴異幼稚より浮屠を信ト泉涌寺の法主周律師ふ就て出家せんことを乞律師之を止て曰汝ハ年未弱し他日僧と成も晩からぬと勸て何へか仕官せよと云ふ之に因て吉兵衛或人の紹介を得て彦根の城主伊井掃部頭直孝に事へ障るふと在迎名を常右衛門と更めたり斯て常右衛門ハ主大事に忠勤を勵みれれ心主人の手前同僚の聞へも能殊ふ文武の道ふ達したれを主人の鐘愛淺かゝず僅の程に立身ゑて近習の列に加へられ直孝に從ひて江戸邸に詰御納戸役を勤居たり然れば常右衛門は是よりして漸く勳勞顯れんとするも浮雲明月を覆ふ譬の如く同僚なる稿本軍太が花柳ふ遊び主公の金子を多く濫用て竟に逐轉せしよゝ其誕責同勤一同の失策となゝ皆永の暇となりしは夢かと許り呆るゝも早詮力の無もの柄除て知己の人を憑み神田須田町の裏店を借差づめ賣藥師と成果て細も消る活業に今日かあすかと變る世や身の零落を嘲ち居たる

に不斗病の床ふ臥初めて仮の疾病と思ひしより重症して百日余りふ耳りしかば聊かの貯へを遣ひすて浜人の身の衣類迄も賣代なしたるも之何詮術も夏の夜の蚊遣煙らも時しもあれ隣家に行き謠曲の門付聽て想はず膝を拍世には同じ様な者もあるなり翌日より其身が合力受る報謝の爲に今日は吾より惠與んと一二錢を紙に捻りて投與其翌日より毎日謠曲うたふて門前ふ立病後の糊口となしたるは淺猿歟もまた是非ずなき一日常右衛門例の通り深編笠ふ面部を蔽ひ淺黄小紋の破羽織古びし大小帶刀て淺草倉前通りへ來る時和身ハ石井公にハムりませぬか若し常右衛門殿にムそなら御伴して參れよとて主人が那處に控へて居りまするると陳ければ常右衛門後振返り笠の際より透し看ば是一個の若黨なるゆゑ訝り乍ふ詞を返し何如にも拙者は常右衛門貴殿のゆ主人ハと聞をも待ず若黨が然ば先と石井を伴ひ一町餘り跡へ戻り一茶亭へ連行けり不審ハ晴ねど勸めふ從せ二階へ登れば曾て知る當時酒井雅樂頭の家中の士高木賢助なるゆゑ互ひに久ふの會合に無事の挨拶先れとれり賢助は膝を進め去る歳貴殿が暇となり涙々せしと聞大に驚きたりしが其後ハ何方に何如して居らるゝやと最懇切の言詞なるふ石井は舊來の懇意を捨ず且斯零落せしに応を尽すを深く謝ゑ頃來ハす

げおくも神田の裏居に栖よしを物譚れば賢助と聽毎ふふ氣の毒なる顏色をなし心だふ消れも又身を立る瀬も有べゝ浮沈は仕官の常にて窮達は士の習なりと石井の心を勵し相語ふふ間に好誂の酒肴を持運べも先今日ハ寛ぎて一献を過し賜へと若黨に命を取せ暫し互に報酬ゑ稍半醉に迨びし頃賢助云る様是よりは及ばず乍ふゆ助力に心ろを竭すべし主人雅樂頭ハ殊外能の道を嗜ミ給へども家中に謠曲をゆ教授致す者なければ昨今之を探ね中も之恰好和殿ハ其道の達者此簾を以て主人ふゆ推擧申さん去乍別にゆ意存にても在そにやと問に石井答ふる様忠臣二君を奉せざるの本文には聊か違へども宜しくゆ周旋に與り度と謂出るに高木は吾心切の空ゑかゝざりしを悦び是今より辻謠ハ止賜へこれハ些なから當分の料にと懷中より金十兩を取出し失敬を顧みずと與へたり常右衛門ハ押戴き辞まば反てゆ志ざしを無にそる事と厚く謝を述べ懷中せり斯る間に早晩日を西の端に傾きたれば兩個ハ他日を約して立別れぬ賢助ハ歸宅の后謠曲ふ老し者ありと主人方へ申し上しに然者在ば百石に抱ゑんとの首尾を得て此由石井方へ報せ遣支度の金さへ添たるふ常右衛門の喜び大方あらず遂に酒井家の謠曲指南役と爲り門弟等を懇欵ふ警古して又時〻主人へ召出され謠御意ふ叶ひて

は拜領物等有て不自由あさ身分と爲り賢助れまた常右衛門を推擧するゑ懇切を尽せし事主人の許ゑ達し其篤實を感せられ加增の上格用人に立身せしと是陰徳の陽報あらん常右衛門は萬事に實を尽まて取扱へバ門弟等の上達速く其聲聞益ゝ高かりしかど翌年は祿を增れ使番に昇身せり爰に常右衛門の風聞愈ゝ宜きを以て新參者奴がと同役の憎ーミ大方あらず一日同役等打寄りて昨日今日迄袖ごひしたる乞丐奴に我等の仲間となられしハ太ど恥辱と念ひ居るゑ斯家中若者輩の人望を彼一人ゑ収れては剛腹の至りやゑ同僚の穢れを潔むる爲且と彼が肝を冷ー以后の懲しめに痛く恥辱を與へて慰さみゑせんと同役言合し或夕何氣なき体にて浦田傳平横内剛作の兩個常右衛門許を訪問浮世の談まの末今茲も既に彌生となり東台墨堤の花を笑初バ十八日の觀音をかけ墨堤の花ま た解語櫻ゑ氣を散ヒ勤の樽を晴さん程ゑ是非とも同伴あるべしと云はれて忍に好ましからねど是も仲間の交際なと特ゑ新參と思へど這れ一層の浮催ー繰合せても浮伴せんと承允けは兩個ハ連約なき樣ゑと堅く約して立去り後ゑて常右衛門今夕兩個が不都く觀花に誘ひしは我に恥を與えんとす謀計の民あらんと一人等思の深更鐘に當夜ハ寢ると に就きたりけり翌下常右衛門ハ昨夜思ひ付たる計策をな

さバやと唯一騎密かゑ新芳原へ出往き太門口よと廓ゑ入れバ實に別世界の光景と花に清香あり月に陰りある春宵の直ひ一刻ゑ千金をも擲つは惜からまト是を思と襄に軍太が身を過てるも凡夫の淺墓是非なしなど獨と語つゝ徐々に歩行て三浦屋と染出ーたる簾暖を見付其傍ゑに彳居る男に對ひ拙者ハ高尾太夫に逢度が紹介は出來まじきやと願たりけれど若者ハ不審なる親色にて成程高尾迚遊女なれば決して出ぬ譯ハなき筈なから太夫さんをハ聘ゑなつては容易のことでハ座いませんがゑゑ遊るらバ雖ど他の者でハ如何樣と愚弄半分答ふるにゑ常右衛門も尋常にてと可ふまじと思ひ南鐐二枚を與せ拙者が高尾太夫に面會を遂度は戀情の事にあらず身分に係ハる大事なれば密ゑ太夫に懇み置ん爲め越しゑて一夕の春を媚ーまんとゑハあゑざるなり汲引の程を依願いると言出るゑ陰司の沙汰と思ひしも金の利目か彼者は俄ゑ繕ふ笑輕薄夫ハ容易あらぬ譯事件何ハ扨て只今太夫ゑ申ーまする間暫らく是にと一坐敷に伴ひ措斯と高尾に告ければ高尾ハ終に知ぬ方なれども武士が願む仔細ありてゑ尋ねとハ格別の事聽て御目に掛らん故浮挨拶を顧みまそと云ふに若い者ハ此由を常右衛門ゑ報せ猶奥座敷へ案内せり玆に石井が待間程なく高尾は綺羅を裝ひて粉裙姿しとやか

ふ禿番頭を伴連れ徐ろに出て座につく風姿の艶麗さハ今の廓ふ全盛誓す二世高尾と其外貌に
ぞ知ける常右衛門ハ儼然と抽者ハ酒井家の家臣石井常右衛門と申す者今日是へ越たるは其
許と見込御憑の筋ありてとは近曾甚だ不躾乍ら早速の御入來窟に以て大慶せりと言葉正し
く陳けれバ高尾は禮の正しきふ先の程より常右衛門の相貌を熟々觀たりしが適れ一個の丈
夫にて威あつて猛からぬ骨がらは世に頼母敷方樣やとそれか有ぬか慕てしき想ひて愛ふ初
戀の處女が愧らふ風情にて御念の入し仰かを了に存せぬ御方あれやを卑賤女をも捨給ハず
御憑とは何の樣なる御用の筋か仰せ聞られ下されたしと問に石井ハ四邊を見廻し抽者が御
依頼の儀ハ極密の事柄ふて大に他聞を憚るや名此上ハ近習の者を御拂ひ下されさしと言へ
バ高尾ハ新造禿等に目報なして其座を立去らせたり時ふ石井と一段聲を密め始め掃部頭に
事へしより當時酒井家の使番迄ふ昇身ーが鳴雉子と擊るゝ慣ひ覚に同勤の妬を蒙り來る十
八日は觀音詣で墨堤の花より廓の櫻と觀花に託け誘ハれしハ察そる所ろ吾が廓馴ざるを花
ふ恥辱を取する豫計也抽者が恥辱ハ素より些なれやも主人の名にても出なバ不忠の至と故
其節其許の謀ふいにて宜に執なし下さらバ必や彼等も案に相違して無事に一坐も納まゝん

との覺悟なり高尾と云ひ名を聞慕ひ願とアすハ此義ア之餘儲無体にて遁るをバ高尾ハ始
終聽終これハ何ごとかと存ぜしふ容易にこと賤しき流の身ふし有を高尾と聞て態々の御越
しは妾が名聞身に餘れり浮河竹の身にてそら負をとるのハ必外者況てやハ武士の御身の上
返す〳〵も御無念成可必ず歎遇まゐらすればハ心配ハ無用に爲給と懇諾事に信實たちて
后にハ酒肴等を出せしにア常右衛門は其懇切あるを感じ夫々の計らひを爲て最も悦び心落
居て歸路に就さり是ぞ二世高尾が世ふ石井高尾の稱を得たる端緒なりとハ后ふア思ひ合さ
れける且説十八日とありけれも彼の浦田横内等ハ今日こそ日頃の怨を舞ぎんとて朝疾より
書翰を寄て常右衛門に約束の花見を催し來れり常右衛門は當番の都合ゆれば跡より參るべ
き旨を云遣り出會の場所を照合せさるに江戸町一丁目玉屋方に御侍申すとハ愈々吾が推察
通り觀花にあらで恥見せとハ未練千万の奴輩よと唯り嘆きて出勤せり此方ハ直に吉原に出
往き玉屋の奥座敷ふ間幇末社のだゝら騒ぎ黄金花咲廓の花花ふ花添へ嚊立跡より連が來り
しならむ存分嬲と盲合先石井の來るを待不娛たり

第二章

恥を花柳に與んとして却て辱を受
義に依て怨を雪ぐ意情遂に　渡也

欺むく者も亡ろぶとかや浦田横浦等倒まの恥辱を受けんとハ露知ず石井の來たるを遲たりしに常右衛門ハ朝の程とふ勤めを畢り一人後とよゞ吉原なる玉屋の店頭へ深編笠を冠りて入り來たれバ若のい者等ハ見るよりも皆な口〳〵ふ辻樣の傍越しなり辻大臣樣の傍通りあるぞと愚弄も偖ふ察せし如とくなれとゞ思へども何知らぬ顔をなし案内に連れて奥へ通れバ早割間藝妓の大愉快同勤ふ挨拶する間もなく滿坐擧て雜言を吐どよめき哂ふ無禮も捨てず今に裏愧あたへて呉んと唾液を呑で泰然たり去る程に横内浦田は常右衛門が零落して辻謠を謠ひ歩往去あとを場所をも嫌ハず喋〻るにゞ傳平の敵娼の淺衣がやをら突立常右衛門の背後に廻ゞ「アノ美しい髪の結樣是では如何太夫ぎんでも堪えられぬ執柄下り何と歌菊さん可愛ふしいと云ふか實に偏痴氣な傍髪ではないのと罵よ連て剛作が「オ、夫〻併し夫でハもてが薄と立上り是あゝ如何ぢやと髷引上れば牽頭末社若ゐ者座中一同立上り皆手ごめに元結を解散切髪の辻大臣樣とてドつと一度に囃し立手を打て笑ひけり常右衛門ハ充

分に嬲らせ時分は好しと乱れ髪掻撫乍ら傍らの棚ふ備へたる硯箱を取出し聽て一通の文を認め「イヤ浦田殿横内殿各々方は既に敵娼を呼び迎へて楽しみあるも乙我等も馴染を呼聘て傍一座の花を添まつらん此文箱を三浦屋の高尾が許まで届る樣頼と升と若い者に渡しやれば尚嘲愚の種を増し辻ナニ常樣は餘りの騒に逃上免され氣でも狂は致さぬか此文を高尾さんとハ何御用「ハテ知た事太夫を聘で遊のさと云ば座中一同に笑出〻「ヤレ〳〵是は迂上だ本氣の沙汰ではムぬゞ今の廓ふ全盛と評判の高尾太夫逢と言ても及ぬ恋大盡や大名でさへ初會は一月前から云込を當事もない石井さん其樣安ハ太夫ぎんでハ坐んせぬ夫より和殿相應な小格子の娼妓を招ませうと嘲弄れば傳平が割間の源八に貴公一人世話をして呉新造でも呼で置くが宜と云傍より淺衣が其に常さんの仰山ふ終に一座もせぬ花妓ふ文や使を立るとハ阿房も物と品ふ據るとまたも呵〻打笑へり常右衛門の是等の騒ぎに頓着せず是を若い衆我等が送る此文箱戻されてハ愧の上塗り是非とも行て高尾ふ届け返詞を聽てと再三強れば可笑けれども詮方なく突戻されて赤ハ顔ふ氣の毒は見た樣なと咳き〳〵立出て三浦屋ふ至互細を告れバ必定文箱を突返すとハ思ひの外取り次の者が文筥を奥へ待行て玉屋

からと高尾が前へ差出せば高尾は夫れと知り乍ら先封押切りて始め終りを一應讀此使をと呼んで呉んなんしとふ使は何やふ小氣味悪く高尾の座敷ゑ到ると石井とい隙て既知の容子よて「外の女郎衆も來ちやかいと聞れて使ひい不審顔案ゑ相違の成行ありと思ひて石井が連の者ゑ辱しめゑれて居るを咄し又連の相方い皆定りたるを語れば「石井主は久い馴染で幸ひ用もある程に只今參ると和郎から返事い口で能樣に是い些と輕頭さへ投つけられて愈々吃驚り暇早〻飛如くゑ馳歸」「サア事が出來〻太夫い疾から深い馴染今此處へ見へ主すと聞て玉屋の夫婦は呆れ固より中店の玉屋なゞへ全盛の花妓の來よう例あければ驚くも實ゑ無理あゑざり偖坐敷へ此よし知せんと使ひに往し者を直に遣れば其顔を看て常右衛門「オ、若い衆歸られまーたかシテ返詞は如何で有たと問れて使い体軀を偃いし「ヘイ只今是へ御出ゆ座ゐまゝと云を聞て一坐の者ら色を失ひ何高尾が來ると俄に恐怖心き皆逃込して見へけれど坐敷は寂寥水を撒たる如くゑ替れど常右衛門い呵笑高尾とて天狗や魔界の者にあらず各〻猶一層騒がれよと謂ども目と目を見合て受答へさへ碌にいせず酔たる酒も醒たるか物音をへ無居處へ高尾太夫い新造禿を引連て靜々と玉屋へ來り奥に通ゑて座に着た禿

が定紋付の煙草盆金銀の煙管あゝ取出せゝ之を高尾と常右衛門の前に扉列べたる態狀に浦田等が相方は始めの素態何所へやゑ孔雀と並びし鴉鳥に似て覩る影も無き有さまあり高尾い常右衛門に久〻なる面を述又同伴の両人其敵娼を始閨坐の者に挨拶なして後何やらん目と以て問べ常右衛門は浦田横内を指示是成は拙者が伊同役今日れ誘引に聞ひ主所ろ伊両家を始め女郎衆までにイヤハヤ甚い御世話に與り一方ならぬお接遇に預りたれば和娘ゑも宜くゑ禮を申て呉やれと有し次第の裏を語るを高尾は聽て是は〻〻伊同勤樣で有んしたか新參の石井主なれば嘸御世話に成事で有いせう宜く伊頼申いすと廓の言葉に夫とは无く當のかれば両人はモジ〻爲乍慚かし氣に是い伊挨拶拙者い横内剛作拙者い浦田傳平と申者と語音一齊宣出るを聞き高尾い看遣てホヽと笑ッヽ這い儼然ーい仰せゑ人夫や貴郎方が伊使者の間で云んす事是若い人久主振ゆを常主ゑ酒一献呈て呉れ看が大ふ亂れてゑるゞへと雀の中の鶴の一聲玉屋の者等い太夫の横嫌を損ねぬ樣にと言が隨意欵待したり高尾い石井の顔色を眺めモシ常主へ今日い何時ゑない主の顔色また其髪の乱れ樣い何ぞ爭門でも爲したかゑ同伴の伊方衆と主い途中で喧嘩でも成しさかエト問れて両客淺衣等い手ゑ汗握り顔見

常右衛門
実を明して
高尾を待む

合せて言詞なし常右衛門ハ坐中を着し否喧嘩ハせぬが最前此處にて皆の衆がとゑかけたりしが咽を作り何斯よ途を急ぎて來たりしもゑ當屋へ這入る上り口で暫りを解り此爲体是も坐興か散切大尽方〳〵のお慰みを増したのサノウ各〳〵がたと打笑へバ座中は何と生弓の甲斐あさ事を仕出して言解術に窘しむ際高尾ハ「オ、危なや何處ぞ痛はしいせんか萬一や其時御腰の物が拔たゝ何と淺衣さん歌菊さんも居さんしてドレ髪を束しいせうと詞の下より鏡臺を禿梅次が持出つ石井の前に据けれも高尾も櫛を取上て亂し髪を梳上る義理と恋気地よ達洞す其恩愛の心根を誰か一時の事と知べき斯て程あく髪を終れも「いさ御酒をと亭主の詞を高尾は打消ア、妾し許ゞが物言てお同伴をんや皆の衆は無言の業とんと座敷が寂寥わゝ此樣な所ろに在やうより閨房で一盃酌んせうサア御出なんしとて石井の手を執り引連て三浦屋へこそ歸りけれ跡にハ一同溜息つき肝を拔れて呆氣ふ取れ牽頭末社も風胡〳〵に辞を告て逃去も花咲春の賑ひを秋の木葉と散失て両個ハ黄昏比ふ玉屋をバ立出たり却て説も常右衛門ハ高尾ふ伴られ三浦屋に至り厚く今日の謝辞を陳れバ御念の入しゞ挨拶卑賤此身の好侠心足ハぬ妾で濟たるハ甚と悦こばゝ去き事乍ら一層彼等の怨みを來し憂恨に思ふも

知べのらずゞ油斷をなさゞなとの心ろ添殘る方あき言葉の末是かゝ一献寛緩過され過剰の憂を晴し賜へと語る際亭主四郎左衛門も出來り初對面の禮詞畢り出來の酒肴を所ろ狹まで取あらべ廓に名伎の藝奴幇間を招き寄常右衛門を欵待ば高尾は故意と玉屋に呼べれし牽頭等を他の藝人の上坐ふ措も太ゞ面皮を欠たりとゐん去程に常右衛門は痛く酩酊して歸路に着べき度を失ひ甲乙そる間に酒宴果新造禿の勤めにて浮か〳〵閨室ふ誘なはれゞ茲ふ剛作傳平ハ反對に恥を與へられ無念益々遣方あく此上ハ如斯と両個ハ何か謀し合せ廓門を出て五十間を過堤よ上物の小陰に身を忍ばせ常右衛門が歸りを今や遅しと待伏せしふ夫ゞと思ふ人も來ず漸次に更深蛙の聲金龍山の鐘の音は丑満報る比となれば両個は要厭倦土堤の露となさんよりハ彼が花柳に浮るゝと言とて是を瑾に主人に諌し再び元の辻諂ふ爲んこと快かれ然り〳〵と両個ハ齊しく考案を替て屋敷へ戻りぬ

第三章

奸人を切て身竊旅の客とある
草賊金を奪ふて善化を發念す

之を戒しむる色ふありと理なるかゝ常右衛門ゞ女色に惑溺ハ非されとも不郁く高尾と契

り彼が情に羈されて通ひ路繁く鳴神の音ふ聞ゆる雨の夕も風の旦も何かせん切なる情の濃かあるに羈され今ハ膠漆も啻あらざり然ども主人への勤め向に於ては更ふ欠ことなければ傳平剛作等ハ是と云ふ諺言の搆ふべきなく無念の唾液を飲こみて時の至るを待たるが一日傳平訓らず妻のお文に近頃常右衛門ハ花街ふ通ひ高尾に篤く馴染を重ねて勤めも上の空なりと話して聞せれバ同氣求むる妻のお文が倏ち尾ふ尾を添て石井の浮名を家中一統に聞えよのしと或ハ出入の者或ハれ向ふの妻小女ふ宣言せしに因りて早晩常右衛門が廓通を誰知らぬ者のなきふ至りたり實に掌を以て水は塞ぎ難く人の口に戸ハ建がたしと云譬も宜あり他の善を猜む小人の悪策を憂て常右衛門自失たる時高尾の許より一通の芳翰届きたり何事ならんと封筒解々讀下せば急即ち目通を遂たきとありとの文意に折悪く今夕ハ宿直の當番あり差繰んにも同役に替りを憑む人なけれも詮方なしと翌晩出向ふと、して即日ハ宿直の爲出勤せり有在拐に常右衛門ハ思ひ胸にあれバ色自づのら面てふ顯ハれ宿直に在りても何となく悒鬱る体を主人ハ看られて石井の憂を知や知ずや御手近の文庫より金百両を執出し之を常右衛門に賜ハり今夜ハ別に宿直ふ及ばざるや否何處へなりと行て保養せよと難有仰

を受しハ日常念ずる觀音薩埵の汲引ならんと喜び勇ム家ふ歸ると直に三浦屋指して馳往たり三浦屋四郎左衛門方にハ高尾を根引の客ありて今夕は芽出たく太夫ぎんが請出されて廓を出れば出入者までも喚あはめ最華麗に送らせんと毎時より混雜を極めたりしが何故ふや高尾は常主が見るまでハ仮令身受の客ありとも妾室へ入れてハ成ラぬとの厳き詞に了聚等ハ如何なる故と解せざれば皆訝しそて居る内ふ小夜深て常右衛門來りしにゆ高尾の坐敷へ連行て内に入るれバ這は抑も甚麽ふ太夫ハ白無垢に身を纏ひ机の上に香薫らせ何時の程にか自殺して紅に染死したる態を看よと一同興を醒し愕きたりしが常右衛門は亭主四郎左衛門倶々其邊を視るに樓主並びに常右衛門に宛たる二通の遺書有て其書中に河竹の身にし在も二世と契りし常右衛門を措て他に身を任さじと誓ひしを仇し人ふ受さるゝ事の憂て竟に非業の死を遂たること及び樓主に永の年月の恩を謝しそとこと等認あれバ皆感涙に袖を絞りしが特更常右衛門は痛く來ることの遲かりしを歎き且最期の天晴ある態を稱して止ざりしものかゝ掌の玉を奪れし心地して男ながらも涙に壁を曇らせて唱名ふ無常を唱つも理りなり浩れば跡々の件ハ樓主に委ね紀念にとある緋縮緬の肌着と那の遺書を懐中ふし除波

惜しくも悄然と此處を立去土手の中程に來りし時何奴ならんか行先へ仁王立ふ突立塞り聲荒ゝかに「ヤア石井日外やゝ玉屋にて能も吾等ふ恥辱を與へ高尾に連れて阿容々々と鼻毛延して失をつた返報受よと言ながゝ曲者兩個左右かゝ切込で來る釵ぢき刃憐れ二ッと憶ひさや応得たりと常右衛門体を飜がへして空を撃せ笠にかゝつた此場の出來事盲解術を何かせん斯る上は腕限り夕の嵐土手の露刃の錆とあれよとて逞方も劣らぬ大音聲恥辱ゝ汝から求めた種蒔豚を抱て臭さを知ぬ譬へゝ汝等両人なりとの言葉に傳平剛作ゝ彌々忿怒小癪な大言聽に及ばずゐれを受よと打込二の刀拂ひつ流しつ切結ぶ一上一下手練の早業電火を散して撃合も聲を知邊の闇夜の討爭常右衛門もどかしと遽閣して傳平の肩先深乳の下迄右ふ左へ斫放てゐ苦と叫で動と伏す聲音に剛作可ゝじと逸足速逃出すを汝未練と後方より横様になぐりつくれば無殘なる哉是も亦諸豚突て倒たり常右衛門一息つき人の來ぬ間と死体を引摺堤を降つゝ二人を田の中に埋措小川の水ふ手を濯ぎ渇を霑やし漸くに心を靜め先方よ引挑みた事にゝあれ詮なき殺生爲けりなまた顧ひ回せば高尾の自害奈何ある我身の惡日ふ今は早屋敷へ戻り難し止を得ざれば是より立退き何國へなりと身を躱そころ上策なれと思

念を決し往來なきを幾倖に何處を的と定ぬずして去る淺野田甫ふ掛りし際以前仕ひし若黨なる幸助の件を考へ出ゐれに便らんと漸やく思ひ定ぬとり偖此幸助といふは伊勢國飯高郡阿波曽村の庄屋吉左衛門と云者の次男なるが常右衛門が伊井家ふ勤役中一力ならず目を懸たる若黨なるが今は在所に居て兄は歿去り父も年老とれと家を續名さへ吉左衛門と更め邑の名主を務め居れと然程に常右衛門は八聲の鶏の告渡る頃日本橋に立休らひ以前の邸を打詠ぬ是今生の看納めと胸も曇りて心ろの闇無端あき我身の果や古主ふは不興を受り涙々の身となれとーを朋友の情ふ依て再花咲春ふ遭昔しふ復りし身の幸ゝ又災ひの伏す處遂に傍輩の妬みを受種ゝの難儀に逢たる己か勿体なくも主君を捨て賊ある高木ふ別れ復も流涙の境界とおりしは欲ゝ武運に尽たる身と有繋文武に勝れたる武士なから昔しを惟ひ思はず涙に咽かへりて馴し東都を難去しが吃度忍ろを取直しよしなき未練の述懐に所惜時刻を移したり遲ゝする中ふ若や追人の掛りもせば此上なき恥の胡慮と足に任せて東海道を行はと に品川宿を暗に過ぎ川崎の驛路ふ着ー頃夜ゝ曙のとぞ明ふける人目の闇を忍ぶ身の笠ふ止處ふ購ひて身裝さへ飛脚に打扮つ晝夜を嫌はず道を急き三日目の夜の初更すぎに三島の宿

りに迎りつき殊の外草臥を覺へしも三島の明神の靈現最顯著なれば身の安全を祈うんとて境内に立入り社に暫し休息んと獨り拜殿の縁側に煙草を呑て休みたりしが實夜を別たぬ旅行の勞れに覺えず眠て正体なかりけり斯る所へ玉匣箱根の宿の出端なる路傍の芝生に臥居さる者あるとしが是は此海道にて雲助と僞れる旅盗賊にて上り下りの旅人の荷物を運びて動靜を窺ひ或ひは無理なる酒代をねだり又は荷物を持逃などなし好うぬ業ゐ月日を送る雲の權次といふ函嶺總ての曲者なるゞ常右衛門の人物を見て此は飛脚の容にハ作れ共道中なれざる容子と曰ひ竟ゐ見覺え無き奴なれも欠落者かまたハ商人の失策者か荷物もなくを懷中は餘程困ぎうだとの監へゐ跡より追付一ト利得せねばなうぬと附纏いるを斯と知ねば常右衛門今樣端に生体なく熟眠なしけれも曲者權次仕濟したりと拔足ゐて側へに寄り肌ゐ手を入胴卷を引出て目方を計に正く百兩天の與へと押戴き長居ハ恐れと悅びつゝ飛が如くに立去たる后一時ばかり過ぎ夜ハ更行き九ッ時分吹風身に染む冷かさに常右衛門不圖眠を醒そに空曇りて四邊見わかず最早何時あらんと立上れば腰輕く思ひ帶もしどろに緩みれば道ハ不審と肌を探りみれば金の無ゐ驚ろき南無三寶雲時睡眠みたる其内に旅盗賊に逐業れし

が殘念と氣ハ歩せれども野干玉の暗に黑白も分かされば途方に暮て神罰の爲る所ろと沈吟じ吾懈怠を悔居たり然れも只不幸の中の幸ひは高尾が情念を込たりし肌衣と鼻紙袋と奉れざりしが斯なで武運ゐ尽し身の尙生愧を晒さんより寧そ自害爲すべきかと差俯伏て稍暫涙ゐ及びさりしがまさ心を取直し吁死ハ一旦にして易きも生は難しとかや幸わひ路用の金を遺ゐれり一先勢州へ赴きて彼地に就たる上身の落着を決そべしと意ひ返して神前ゐ向ひ猶行末の守護を伏拜社内を出て伊勢路を志ざし十日餘りの日數を經て飯高郡阿波曾村ゐぞ着たりれる且覽雲の權次は山ゐ歸り今日まで年月仕事を爲ども只少分もかりを儲けたりしゐ今宵ハ我運の强きにや何時になき首尾に逢命がけの仕事あから此邊で思止ずんば神佛の咎あるハ必定あらんと百兩の大金に毒氣を拔かれ觀念して此を元手に家業を營ゐみ箱根功德を專一に造り一惡を懺悔せんと思ハ吾身が恐ろしく未來の程も甚麼ならんとさも不道の雲の權次も一念維に發起して菩提の道ゐ志し始めは箱根名物の細工物を仕入しが次第に運開き後ハ材木商となる爲そと咸圖に當り後と近邊より江戸へまで金銀を貸出ほどの分限者となり家を小田原に移し三島屋平六と名乘昔しの罪障消滅の爲とて六十六部或は又

往還の雲水乞食等へ報者宿など設れて旅しければ其家益〻繁榮せり

第四章

士人志を屈して農夢ふ緣を結ぶ
身上を說て反て一生の訣を索む

古語に曰く凡そ物に爭ひて勝ハ失の本なり之に負るは得の本にして爭はざるは負るの大道なりとされバ勝て失の孽はいを求めたる彼の石井常右衛門ハ勢州飯高郡阿波曾村に迚り着名主吉左衛門の幸助等に對面なし重なる災難の一伍一什を具ぎふ語りて身の落居を賴まけれバ吉左衛門父子ハ大に驚き且勸り年來幸助が請さるを恩を報ゆる時至れり何ぞ粗忽に存ずべきやといと深切に圍まひ置ける程ふ常右衛門ハ吉左衛門なる幸助の家に居て近邊の兒童等を集ひ手習或ハ希ふ謠曲ゐを教へ其師匠をあーて半載餘りを過しさり却つて說江戸にてと一夜の内ふ石井浦田横内れ三名が行衛知ずとあるとりしハ常右衛門が兩個を研捨跡を闇まし逃亡しとの風聞あるとしのバ高木賢助大に愕き常右衛門ハ斯る思慮なき者にあらず是全く他に仔細あらん兎に角主人へ言上せんと其趣きを彼に達しれども殿は是を聞捨よして先其儘に捨置れと爰ふ阿波曾村ふ農夫八兵衛といふ者あり先祖より可なりふ暮して田畑も多く所持しけるが一年鎭守の祭典のとき不計思ーき友に誘はれ賭博の場所に至りたるが次第に深みに陷入竟に其負財三百兩餘りに及びれれば田圃と固よと家財諸道具まで賣却ひたるも猶年貢上納に二割目むかりの不足を生ず如何とも爲し難くて其儘在所を逃亡あゑ迹に殘りーハ今茲十七歳ある嘉六と呼悴一人なり然ども未だ若年にして年貢未進をし納すべ兒力なく村方の組頭始め仲間一同出合て先これを上納なし田舍氣質の農夫等なれば親は憎くも子に崇りハせぬと寄て集りて嘉六を見繼不自由あきまでに世話あせり然るに曩頃泉州界より來りしとゝふ一人の娘あり容貌群ふ過れ長然風態なるは適れ良家の娘とハ見ゆるものから是ぞといふ親緣なく甚ず雜儀の体なるにぞ阿波曾村の人〻相談合双方の爲なるべしとて彼の嘉六が廿二歳の時改めて是を嫁にとらせ名をれ貞と喚かへて夫婦となしたりしが夫婦の間最睦まじく他の見る目も羨ましきまで故村の人も安堵して八兵衛の跡を相續させたり然るに嘉六ハ性得實体なれど親の不所存よりして未進の年貢を村に迷惑かくるハ憂こと、思ひ女房倶〻骨身を碎きて稼ぎを根のなき仕事に大穴を塞ぐは容易業ならねば果て若ふ病で竟に二十七歳を一期ふ其年八月病死せり女房ふ貞ハ飽ぬ別れに杖柱と頼みた

る夫に死離れ嘆くの程言ん方なく如何へせんとつゐいつ思案ふ沈ミ袖のミ濡して居たりしが二世と契りし夫の爲また兩親の菩提の爲髮を剃して尼となり未來の罪障を解んものと此由名主年寄其外村の重立たる者に云出けれも皆其赤心を稱さぬ人てあらざりし然ども幸助の吉左衛門が所は尤もの事乍ら世ふなき例にあらざれば未だ年若の婦女ざかり再度の夫を呼迎へ村の租稅の明を辨へ此家を起さが亡き夫へ菩提とゐふもの且百姓の勤めあり殊に其方へ此家ふ一人遺りたる大切な身の上此より猶村の者が俱々に周旋をして相應き人を後夫に嘉六の跡を續させたし尼法師ふなるあやとへ必ず思ひ止まりねと心を尽して說諭たるにお貞が心ろふへ染ぬやも名主殿の意見といひ殊ふ嘉六は年貢の借財を苦に病みて世を亡し事なれば冥土に倒ても無や朦懋の念晴ざるべし左すれば二貫目の借金を片づけ一ッにへまた親父の賣拾し田地を受戻すが追善の第一と尋思を更て異見に聽ひ憂月日を消り其歳も暮て翌年の二月に至り村の組頭等が名主吉左衛門方へ來て云やうふ主へ何と思はるゝか嘉六の女房へ貞も今盛りの年齡なるに那の儘に後家を立洞させて措は惜ものの夫故相應の人をと疾から探し居たる處幸ひ此處には坐るは渥人手習ひ小兒や諸ひの人大勢弟子も有ること

なれば那の家へ入り婿にして兎も角も一軒の家主と成ならばまた萬事の都合も宜からん特に聽へお貞も胞からの農家でへなしとのこと舊へ武家の娘とやら是と夫婦にしさあらば一家和合して繁昌するへ知たことゐ渥人は打て付の能後夫仮令何と言るゝとも斯して邑ふて左衛門兩手を拱ぬき且らく尋念の体なりしが皆の衆へ能所ろに心付れさり此上へ石井樣を勸め承諾させんと先組與等を歸し遣夫より常右衛門に前の巨細を委しく語りけれで常右衛門も固より好まぬ所なれども永ふく幸助の世話ふなり且へ斯して何時まで過べくもあらぜ又世を忍ぶ身の上へ農家に陷るも宜らんと人々の勤ふ任せお心ろ添の段近屬以て忝けなし吾身も再び武士になりて花を咲する存念を絶農民となりて世に隱るゝへ幸ひあり併し二貫目と云返金へ數年懇りても苦しのらずや若し宜しき譯あらば嘉六とやらんが跡を濕べしと挨拶なしければ吉左衛門の悅び大方ならず二貫目のことへ右より左と云辨濟ふあらねど必ず淫心ろふ掛られお唯彼が家さへ立てば仔細なし元來貧方に貸さ金であれば急に返せゐど丶無理を言べき者あし猶また仕駒ぬ百姓業に鎌鍬をとり玉ふにもあらず矢張是までの通

り敎への師匠にて一家の家主となり玉ふなれば今迄とゝ事違ひ人の氣受も亦宜く萬事淨身の爲ならん彌〻其れゝ極め給はゝ村中へ告遣ゝんと言れて石井ゝ宜に憑むと承諾けり斯れも吉左衛門は其よしを早〻村中へ言報せーに人〻も大きゝ喜び良辰を撰みて愛に桑晉の好を締べせ是ゝ常右衛門ゝ二世の嘉六となり松代嘉六(松代は嘉六の姓なり)と改めて其家を相續しけるに れ貞は戀慕ー夫の蘇生りたる心地枯たる朶に花咲思ひして夫婦睦まし く夫ゝ手習謠曲の師匠女房は苧をさ兒機を綴浮世の塵を餘所に見つ朝夕れ煙を立て暮しけるゝ結局娛し兒と爲べし夫より四年を經過一日のと今日は月の廿五日成べ菅神廟の淨祭日ゆゑ寺子を休み夫婦相對にて在ける際お貞が常右衛門の嘉六に言やう折を見ゝ談し申さんと思ひ終伸〳〵に成さるが妾は元和泉堺の城主に事へたる森川六之進と云侍士の娘成妾未だ幼少の頃父ゝ聊のの越度より永の浪人と成たる其時一個の姉有ゑが是ゝ父の歸參の可う樣に金を整へん爲め身を江戸芳原の廓ゝ沈めたりしが其后三浦屋の高尾といふは姉なりと人の噂さに聞及びとりさてまゝ父は其身の代金を携へ返る途ゝて何者ゝか殺害されしを年月經たるのちに報知を受け母の愁嘆妾の哭み重なる難を苦にあして母て堅疵病沒て後に殘りし妾

の身寄邊も誰か白妙の袖も涙ゝ色かへて東都の花街にあゝと聞く姉を便りに覺束なくも此伊勢路ゝで辿りつきしが慣はぬ旅に足を傷め此邑者に救れしゝ今より十餘前なりかし然べ斯和郎と契り今ゝ胎兒さへ孕せし身に何て躰しだて爲るゝにや和殿が每に放ざる那の編綿の襯衣のこと又文と思ゑきもの、事故を明々地ゝ譚り聞せて給ゝれよと語るつ問ひつ爲れて懇き甫めてれ貞が身の上を聽べ高尾と姉妹にて有りーとゝ甚麼なる過去の宿因かや吾姉妹と緣しを結びーは面愧かしき限りなれとも知ぬを悔て知后は涙速の芦か節の間もあしかる緣しと思ひしかべ回答詞に躊躇たりしが有技有樂談話を聞てろれとゑく那の二た品に付ては汚れし件の多くゑて今日菅神廟の日に會り語り聽さんは神を穢その恐あり這て後日ゝ讓るべしと他事に移したるゝ秋の日脚の短くて日ゝ稍西ゝ傾むかんとするよりゝ良は坐を起炊ぎのあとゝ手を着しぬ

第五章

愛情を斷念して夜家を脫る
貞女夫を慕て大に路ゝ病む

何時の間に年月の事思ふらん會は一夜の今朝の別れを時在て合時在て離實ゝ聚散は定なし

秋の夜も既に明放れ軒端に囀ずる雀鳴ふ夢愕かされて れ貞れ眠覺し傍を見れも早起出しふや夫の在ざるふ朝疾より何れへ越しと訝りつゝ机の上を風斗看るふ森川れ貞殿石井常右衛門と誌したる一通あり欵と驚く胸を鎮め封押開きて讀下せば我儕郁〻も和娘と夫婦になり仮初あから五歳を過しとりされども未だ貢租未進の返濟もならざるれ村人へ對して面目なく且冥途ふ山る嘉六殿へも一分立たず又我儕こと其方と末永添遂難きことゝ云へ開ずは別儀に非ず高尾が我を慕ふて自害せし始終を記し此二品は姉より吾へ送りもの今れ其許へ遺物あれば篤く所持せべきこと又浮身胎内の兒を分娩さも大切ふ養育を遂ゞれよ猶〻名主幸助殿や組頭等の人〻へれ其許より宜しく謝辞を賴み入る吾は重なる宿業よより廻國修行して後世の菩提と吊ばん等こと細密に認たゝめるにそふ貞て覺えずツット擧立岸破を伏て正体なく前后も知ず泣たりしが何の因果の報ひぞや先の夫れ貧苦ふ死し今の夫は生別れかて〻加へて姉上さへ死せしと聞たる憂悲しさ思へば〳〵我身程世に形きなき者が復あゝふかと取亂して嘆れしが何時まで言ても益あき繰と〻斷〻ふ心取直ま名殘惜氣に暫ゞくれ外方を詠め居たり去るもの拥押て心ろを執直せも秋は物憂限りにて淋しさ今まで二人暮すさへ適〻留主は悲しれを今日より後れ只一人如何して月日を消らんと心ろ細きは女の情只管悲きて居たりしが月を重るほど體脆痩せ衰へるを見て氣を勵し夫の行方を尋ねんと思ひ立頃しも秋の中ばすぎ龍田の紅葉奈良の草花世の人々の游山に引替順禮姿に打扮つ跡のとれ村中の人ふ顧を置き西國三十三ヶ所の札場廻りに旅立しは見るも殊勝に哀れあり是やこの行て返らぬ首途とて神ならぬ身の知ずーて伊勢路を出つ一番の札處を尋ね遙々と日數經て紀伊國那智の山ふ着たりける實に那智山の瀧といふは本邦隨一ふして峨々たる山の頂ゞより流れ落る有様には煩惱の垢をも濯ぎ清むべし爰ど楊柳補陀落山觀音薩埵の淨土なれば第一番ふ札所とて雖有法施を捧げて寶前ふ躊躇き珠數押揉んで手を合せ補陀落や岸打波て三熊野の那智の御山に響く瀧津瀨南無大慈大悲の觀世音重罪五逆消滅して自他平等民身成佛南無熊野山大權現愛愍納受させ給ひて冥途の夫現世の夫又自らが胎内の子の安產までを禱り上皆俱一切功德慈悲現衆生福壽海と慇懃に拜ミ終り札を納めて二番の觀音へ赴むのんと羊の歩行はかなくも淨土の彌陀の都へと頓て近づく命ずと我身の上に告るとれ知ゝで唱ふる御詠歌を唄ふて二番の札場も仕舞さて三番ある紀粉國粉川寺の觀世音に何卒安產ある

やう又その兒の行末を祈願なし仮令我身に災難來るも胎内の兒ハ救助玉へ今は世にたき父母の恵みも深き粉川寺佛の誓ひ頼母しき御利生なぞか空しからんと念じ終り夫より四番ハ和泉國槙尾寺へ行んとて大和藤代にかゝりさる頃ハはや九月の中澣なり女の旅の宿かるゝも不自由勝ゑ覺ゆるを此日ハ憎生急ぎしより竟に宿を取外し行方ハ暮て杖も其身も勞れハて早く藤代へ行て宿を借ゑんと心急れて行歩たるゑ今ハ往還の人も絶へ折節空は雲出て弓張月も影かくし知らぬ夜道ゑ風寒く手足さへ冷術なき折から俄に腹の痛疼出し頻りゑ虫儘り最う一足も行れべころ途の邊りの草叢ゑ腹を抱て惱みけれども近所ハ野原家もなけれも如何はせんと苦しさながゑ一人腹を撫摩り居るうち夜ハ更々と深渡り梵刹の鐘の音ハ凄てもすさまぬハ心ろ腹の疼みに原來出産の氣付さる事にや但しハ旅の勞れなるか何れにもせよ斯強く痛てハ堪難し死る命は是非無れぞゑ腹の赤子を産落し人に託で死なら未來の迷ひハなからんに今ハ折角産れしとて母子が母子死ぬるとハア、人戀しや助てとよべと叫べと詮方あく苦ふるものハ虫の音の千草の露を吹拂ふ穂末に當る風のみゑりゑ貞ハ愈々悶へ苦しむ其悲しさハ如何ならん浩る處ろへ大和國藤代の代官ある深井彈正と喚ぶ侍士夫婦の間に

子なきを嘆き同じ國の坪井八幡宮へ百ケ日の立願こめ伴なも連ず只一人夜毎ゑ丑の時參りして口のうちに八幡の神号を唱へ乍ら提燈携げて來かりけりゑ貞ハ夫と見るよりも嬉しくて悲し死聲ヨノウ申しゑ侍士をヨ妾ハ西國順禮の一人旅今宵ハ宿を取り遅れ只今此處にて産氣づき最早一歩も參ゑれず死ぬるばかりの難儀の場合甚だゑ無心樣あかゑ何卒ゑ慈悲ゑゑ助けといふ聲さへもくるゝ氣に地にひれ伏て頼むにぞ彈正愕き是を見て其ハ不便の事なりかし夜中といゝ一人旅殊ゑ産氣とハ難澁ならん藥りハ幸ひ持參せりと印籠より丸藥取出し之をゑ貞に與ふれべ此は有難ーと押戴だき即時藥を呑けれべ彈正暫らく介抱なし尚慰切に撫で摩りて恤撫けるも野中とは云且夜更の事なれべ身体只冷ゆくのみにて益々痛み激しきにぞ我ハ是より坪井へもき役人共に申付手當を致させ遣ハすべー困しからんも今暫し此處ゑ待てよと言を聞ゑ貞くるしき氣吐あへず這ハ有難きゑ慈悲と涙を流て悦べば彈正急ぎ坪井へ來り村役人に巨細を噺し不便ある旅人あれば人を遣てー勦已りて運來り宜ーく手當をなせべえといひ付られて役人等は迷惑とハ思ひながら代官の詞と抛頭ゑハ忤き難しと駭やきながら提灯燈ー彼處へ行て容子を看ればゑ貞は彌々苦しき樣に倒れ伏して居たり然る

に此迎の男といふも慈悲も情も荒くれ田夫の用捨もなく面をはたて代官の云れゝ病人とい和女がことのと白眼つくれむ貞い太と身を霞いし苦し氣ある聲をして何方をまかい存ぜませぬど夜中わざ〳〵俘足勞さま途中よ病して難澁致す者は慈悲に介抱下されましと云聲さへも枯野に啣く虫の氣命ち危うく見へたりけり那の荒氣の邪見夫聲と勵まし匂しろやう大騙欺の順禮阿魔虫が催るとゆふのい錢の三百も欲きならん其手い決而喰ませぬ是はど多い順禮道者虫がかぶるの腹が減たのと苦說たびに偶か〻世話をーた日よは百姓が立ぬ山稼ぎを仕事も止て汝等が件に係りきり代官殿より言付も云據ろなく迎ひに來とが死去で仕舞バ善に慈じひいきてけつかるかゝ己が迷惑サア一緒に行歩ッしやゝと斯程重体の病人が苦しゝ難むを知や知ぬや無理無体に引立れバ貞い苦さ身も世もあられず現存からなる地獄の責免窘苦き聲音を漸々激ましノウ待て下さいませ腹が痛ふて起れませぬ何卒了簡敬してと腹を抱へて泣詫れバエ、めろ〳〵と其吠面汝れが腹の能なるまで何爲て這處に待て居ちりやうサアきり〳〵行歩まぬかとまゝ引立る非道の扱ひゆ貞い左右の手を合せ慈悲慈しや情れじや敬してと身を悶もるも聞バこそエ、面倒な横著女と慈悲も泣々肩に懸ゝれ山の麓に引ゆかれしが或る片陰に怪えげなる猪逐小舍のありしが其中へ投放仙くに逐込みて蓋處へ動かと打下し汝れは此處で死失と言葉遺して歸りたり

第六章

貴女路に害されて胎兒を分娩ま
慈人赤子を拾ふて神意の顯著を感ず

人生の行路山よりも難く水よりも險し況てや百歳の苦樂人ゝ顧るれ貞と夫の後を慕ひ四番の札所ふかゝる途中榮枯は時を嫌いずして腹の疼み堪がたく今は息も絶ゝ〻正氣を乱れくるし兒息の下ゆも大慈大悲の觀世音仮令定業限りありて此身い此處ゝ死するとも腹の赤子を分娩し身二ッにあさせ給へ吾身い此處に死ぬべかゝん返す〳〵も悲しき浮世せめて胎子を生して給べ此子を夫に一目見せ死しなバ命は惜からざるに始めて子を持たれど未だ二月や三月の内は此樣したとと惟ひも寄ず疾く月日を過りたい產落しなバ何斯と思案をせしは仇事の意ひ設けぬ此苦しみ夫につけても猶更に戀玄きは我夫ゝ懷のしの嘉六殿夫婦供々暮しなば如何ほど貧苦に迫るとも浩る憂目いよも猪小舍に臥睡の床かはれど替る飛鳥川堅日をも竢ぬ吾身の命と涙ふ沈む時しもあれ此邊ゝの村里に住居する士にて舊播州明石の城

主松平家の浪人大隅藏人と云仮の名是なん主家の金子を濫用逐電なしたる井伊家の家臣橋本軍太と喚ものあり折節藤代の宿へ出酒を呑て歸りがけ此前を通りあに落小屋の内にて女人の呻吟聲すれば何事やらんと蔭ゆ伺ひ聞き苦しむ中に何者をか一人口説て居れば藏人と酒氣狂ひの悪姦なれば此處且ふく立聞して女あり思へも相方欲しき折なるも是此奴を一つ慰さまんと忽ち心ろに點頭つゝ彼小屋の中へ突這入コリヤ如何した煩ふてかナト面白いことでも爲やんせと抱きかけるにれ貞ハ吃驚何れの方かハ知ませんが俄に差込この苦しみ何卒ぞ助下さりませと云聲さへも枯果て惱み乍らも手を併せ頼むを此方ハ見やるヲヽコレ女些汝に望ミがある外のことでもあい我以前主君より拜領せ！國光の刀新身なれも善時をハかり試して見んと思ひ一に今まで斯云絶首尾を得ず今宵は幸ひ丑滿過たり人も來らぬ事あれバ暫度刀の利味を見るバこのりたと言より疾くすゝりと拔し氷の刃れ貞はあるにも在れず戰ふ慄ふて逃んとそれど今ハ足腰起ずして何卒れ慈悲に扶けてと周章狼狽るを此時早く彼時遲く觀念せよと言あがゝ腰の邊りを一刀ぱっさりずんと切放され何かハ以てとも切發者と玉の緒も斷て傍へに倒と臥せしハ哀れ敢果なき最期なり臨下休題且說ま彼の藤代の代官

深井彈正ハれ貞が途中にて難儀のことを坪井の役人に介抱せよと云置て其身ハ八幡の社へ詣て一心凝して禱る樣男女子の撰みなく一人の兒を授け給へと念願新神ゆ時を移せりされバ稍曉方近比眠ともなく夢ともなく現心ろに大菩薩異香馥郁神殿の扉を開き給ひつゝ聲高く善哉〳〵汝子を求めん爲百日の立願ふて丑の刻に歩行を運び丹精無二ふ祈るは神もろの奇特を納受せり然るゆ三明の眉を開き三千世界を見渡すに汝が子となるべき者更ふなし但我を祈ること甚しけれバ其精神を空しく爲難し故に百日の立願終りあバ我子と成て汝が妻の胎内に宿らんと意ひしに汝今宵圖らずも道にて大慈悲心を起せし其恩惠の心ろ則ち汝ちが子と成てゆの曉ふ一子を得べし下向の途ふ心を付て歸るべしと明らのふ示現ありて甚顯著に寶殿の扉を閉させ給ふと覺えけれも睡りの夢ハ醒よけり彈正大ひに感悅ス道ハ有難ク示現のゆ大願就疑成ひなしと九拜して幡び勇みそれより拜殿を出たるが夜手も不思議なるハ下向の途に心ろを用ひよとの告なり什生ある件のありもや爲らんと道すがら心を用ひて歸りしに坪井の邑の町外れ片山陰の彼方ふ響り赤子の泣聲聞えければアラ心得ずと立寄て猪小屋に心を着れも早曙宵の東天紅く成りしを便りに不審爲乍ら能く見ると道は無

慙やな哀れやな何奴の悪戯なるか最前我が藥りを與へ看護をしたる願禮女二つに斫れて朱ふ染またる非業の体の切口より赤子生れ出ければ不思議を感じて抱上たり是ぞ貞が臨終の際まで仮令吾身い死もるとも此子い生まて玉はれと觀音薩陀を念じたる奇特にや母は斫れて死しあがゝ赤子の体に別條なく其傷口より生るゝみと寔に大慈大悲の利生とゐそい知ゝれ斯時彈正いぶ貞の体を篤と見て實にも不便の者なりと涙を注き居たりしが去るにても斯胴斫ふなしたる口より傷も負ずふ出生もるとい是も亦不思議ありと熟〻赤子を見たりしに玉を欺むく女兒あるに彈正歎と心ろづき既ふ八幡宮のお示現に下向の途を心付よと是ぞ誠に疑ひなく我に授かる一子あるべしあら難有やと伏し拜み帶を緩めて肌ふ着け懐中に温ためながゝ往のんとせゑが風ヲ考へ抑も此女い何國の者か親縁も定先てあるならんと笈摺外し能看れを順禮し奉つる西國三十三ケ所南無大慈大悲觀世音二世安樂の爲め勢州飯高郡阿波曾村農嘉六妻お貞と讀み終り涕を拂ひて手に携へ是は我子の母なれば我が爲にい妻も同樣意へも〻〻不思議の縁斯拾ひ上るうへからい大切にして守育てん草葉の陰で案ぶ給ふな遺念さぬく成佛せよ南無聖靈願生菩提我子ゑ賞ひゑ縁あれば死体は弔菩提所へ葬むり

て跡を弔らひ參せんと赤兒を抱きてうれしさと又悲しさの夜の途急ぎて我家へ立戻り件の譯を具備かに妻女ふ嘶ゑ赤子は斯る能き女兒ぞと見せれば妻も大ひに悅びて初湯を與へせまた近所の者を賴み乳を貰ひ實子となし大事ふのけて世話をしつ又家來等ふ駕籠を舁せ那の豬小屋なるれ貞が死骸を迎へと棺に納め其菩提所朦代の萬松院に野邊送りして後念頃に弔ひたり彈正夫婦は拾ひ得たる赤子をいよ〻〻手厚く乳母を抱へて養育だて世ゑ捨てられし子ありとてお捨と名稱蝶よ花よと寵愛ゑ育て慈愛淺からざりけり談次分岐彼の常右衛門なる松代嘉六いお貞の談話に仰天あゝ創めて玆に憂世を厭ひ回想わせゑ幼稚とき泉涌寺にて出家せざるを後悔し今い高尾その他ふ死したる人の菩提を吊らいんと心ろづきてい仲〻に慈しお貞に告ゑあら反て嘆愁の種を蒔發心の妨害あらんと心ろ苦くも空蟬のうつしこゝろや出んと恐れ夜のうちふ吾家を脱出だし六十六部に姿を更へ日本廻國を志ろざして伊勢路を後ふ立出でけゝ然れど有繋不慮の擬計とて錫杖の中に手槍を仕込ませ鉦鼓を携へ念佛を唱へ聲清朗に五畿を繞りて紀伊ふ出夫より東海道へ懸りしが豆州三島の宿へ若明神の社へ禮拜て法施を捧げ再拜〻笈を下して憩らひつゝ以前江戸を立退て伊勢路へ登る蹄次

ら此拜殿ふて賊に逢既ふ死おんと覺悟をしたるもはや八九年の星霜を經たふ想へた夢の憂世がおと獨り言して函嶺を越豫て聞知れる小田原の報謝宿に一宿を借んと彼驛さして歩み行けり

第七章　闕らず再會ふて奮惡を謝す　幼女身上を知ずして兒童ふ嬲らる

不善と觀て之を去り小惡を傷んで善を積て豈に餘慶なしとせんや去程に常右衛門の嘉へ彼報謝宿を目的に小田原宿に至り三島屋平六方に着て此處に一宿の報謝ふ與ひと種々侍遇れて終夜亭主平六と旅情の狀など晰けるる時常右衛門平六ふ對ひ和郎と六部雲水の行脚は勿論ひらもる道者非人等にのゝる善根をなし玉ふことを寔に感に堪たり然り乍ら道ば什生なる不心惡ふて切德を施ふ玉ふぞ察する所ろ愛兒に別れしものか又た家繁榮を思ふてのゝとか其故を聞まほしと尋ぬるに平六點頭て答ふるやう世の俚言にいふ通り衛愧を曰ね理も知ずとやう我身の恥の懺悔談話書し語りをふ聽せ申さんと那三島の神殿にて旅人の金子百兩を盜みそれを資本に斯る分限に成たれ共恭や此やの親障消滅の方法に報謝宿を致さるり

とありし次第を物語れば胸ふ怪仲嘉六悸き原來那の時盜みしの此平六にてありつるか不思議の件と沈吟點頭て述るやうそれ結構なるほ心底驚き入さることいも也一且の惡に陷いり たり共其心ろを翻かへして善根ふ基かの人間の本意とや云へん只善と惡とは一念の境ひなるを世の人兎角ふれを悟らぬ能ふそ慨悔し給ひしぞ申すも近曾異ふこと乍ら其八九年以前三嶋明神の拜殿に於て金百兩の胴卷をとられし者は則ち某しなりと言出るを平六聽て仰天ふし原來へ左樣ふてふへせーの去りとい知ず亭主態失面目兒次第やと大ふ恐れ領巾伏て謝罪いる他に詞なし良有て是も神佛のお引合せ浮木の龜か隱顯華の花とも云へき貴殿に遭念々迷の雲晴て眞如の月の明けく今より一層慨悔せー心も吾と堅ある可とい千載の一遇か斯にて和殿に遇上は此身代へ吾物おとず即ち貴殿の財產なれ只今其儘ふ渡し申ん何程ふ難を申とも迚も言語ふ尽し難し何卒ふ察下されて此家へふ心の任る可し言るを嘉六は聞て唯を含み見るゝ如ふの身へ六部發心修行の境界には金錢世帶へ用あき事更に以て盜みなーて殿を舊は盜賊でも既ふ惡を改めて斯善心に立歸り慈悲善根を營ふむ身あれ何條吾ふ於て恨むべ兒努ゝ心ろを措給ふふ猶此上はなすゝ善根の志ろを深からしを給へよと言語を

尽して静かに教訓ば返答んやうも投首の難有涕に咽せかへり嘉六の異見に恥らいたりしか忽地ふ座を立ちて引込しが旦らく有て出來り然〳〵ば些少乍ら彼の百両を三十倍にして返済爲ぎん受納下されよと嘉六の前ふ置列べれば常右衛門目ふも觸れず最前も申す通り六部の身にて何ぞ金銀の入べきや腰の鉦鼓を打鳴し供養の手の内申し受け廻國をるのが我境界決して〳〵所望なき殊に此金を賊をしより悪心を飜へ善心を發し給へと是其許を濟度の爲免の金にして諸佛が善根功德を貴殿に取せし物なるべき然それば此の金子は其許の爲の菩智識なり彌〳〵慈悲を施し給へ我れ東西を經歴りて家居も定ぬ身の上なれば決して金に入用なしと受取氣色在ざるものかゝ平六又云種〳〵の教訓身ふ染〳〵と難有し金子は用なき態は聞譯されども某しが冥利の爲め且心ろ休めあれば是非〳〵は受納下ぎるべしと再三乞ふて止ざるふゞ嘉六今れ幹方なく吾等れ固より入用なけれど申し受ねば其許の赤心を思はぬやうあり氣の毒なれども然ゝば納めん由ては此金子にて先の嘉六また妻の父母並びふ高尾が菩提の爲免に頂戴致しすべしと三千両を笈の中に納免たりしが夫より古郷なる我菩提所へ宛て常念佛堂を建立し祠堂金を付置て永代不退轉の道場と致されたしとの狀と二千両

の金子を贈り吾身は東都の江戸へ出て三浦屋方を尋ね訪亭主四郎左衛門ふ面會なし高尾が菩提の料ふとて五百両を送りたれば四郎左衛門大ひに驚き且れ其志しを深く感じけり偖是等の件を濟して后奥州路へ心ろがけ仙臺津輕松前出羽越後信濃加賀能登越中越前等を廻國なるに又ふ拾ば成人するに嬪ひ容顔の美麗きみと綠の髪艶かに風蚕の眉秀で通れ三五となりもせむ嫦娥も愧る姿態あゝん是なん唐土にありしと曰呉姫王昭ふ譬へんか目鼻立あら風俗まで甚氣高見さりれり既に今茲れ八歳なれば菩提所萬松院へ乳母に連られて手習ひに通ひさり色れ香と散ぬるを我世誰ろ常ならむまだ智恵さへもあさ露の蓋のまろやの秋風ふ吹拂はれし身の子とは夢にも知ず彈正夫婦を實の父母とのみ思ひ親父様母親様といふ言の可愛らしく太ぎ大事に育てさり早其年を何時しか暮ふ捨て九歳になりしゝ大きうなるは ぎ美顔容人ふ勝れて麗艶く世間の人の噂ふも皆々れ捨を惜うやし那やうなる子を持し親の心ぞ嬉しからんと云ぬ者こそなかりけれ然るふ捨十歳となる正月に幼兒輩の歌がるた手鞠や羽子の遊びも早終りて十一日の誓古始と成れた朋輩同士誘引合萬松院へ行て各々机えに對ひつゝ墨磨りながら並ぶ子の内ふれ捨の事を知てあるか徒ら兒童が云出してふ捨の

綽号を切口〳〵といひけるにぞ皆是を何の譯か知らぬ者まで同じやうに言囂焉て切口やゝ
ゝと云ばまた他の童子其尾に付て云囃し手さし指さし大聲あげ哂ふ者さへ在りといへども
お捨は何の慢心なけれど夫とも謂ぬ假名手本箅へて文字をちらし書き他目もせずお習ひ居
を子供は尚も言止ず只切口やゝゝと頻りに嘲れり笑ハれて合點往ねば切口とは何の事やと
問返せど大勢に云紛らされ詮方泣々家に歸れば父彈正ハ久々病氣ふて打臥たりしが是を見
てコレお捨何故泣ぞ戻りやつたら優温しく遊んで居よと言けるにお捨ハ涙を拂ひも敢ず父
に向つて問るやう今日お寺にて手習ひを致して居ましさら何の事やゝ大勢のお朋輩が口ゝ
に妾の事を切口や〳〵と云て嗤笑ましたと涙乍らに語るを聞彈正やをら起直り双の眼に涙
を浮めお捨の顏を吃然見やりやよれ捨和娘ハ何にも知らぬもあふ其拉顏ハ尤ありそれゝ付
ても其方ふ見ずる物また言聞せる談話有れども事ながければ先ゝ此處へ來るべしとお捨の
手を取病臥たる床の傍ふ引寄さて

第八章

始て身上を知て幼女復讐の念を生ず
寡婦慾情に迷ふて幼女を追放つ

薫蘭繁らんと欲すれば秋風之を破り月光牙んとすれば浮雲之を覆ふ諺語ハ實に料ふ繩の如
し登時彈正ハお貞が被たりし笈摺を取出し和女と未だ幼少なれど是までは告で置たり夫ゆ
え何ふも知ぬみそ道理なれ今彈正が語るまとを能々聞措くべし抑も和女ハ我々夫婦を實の
父母と思ひ居れども實は然にあらず眞實兩親と言ふは此笈摺りにも記し、通り勢州飯高郡
阿波曾村農嘉六妻貞とあるからハ其方が父ハ嘉六と云母ハ則ちお貞なり又十年以前母のお
貞と其方を胎内に宿し札所順禮ふ出て最早一番より三番までを仕舞て四番の靈場へかゝり
しなゝん此海道藤代に程近路傍にて虫かぶり其苦〳〵みに堪へ難れど夜中の事ゆえ往還も
あゝ誰あつて介抱すべき者とてなく一人其處に難苦して居る處に我其の頃坪井八幡宮へ百
日の立願を籠め一子を禱るが爲ふ丑の時に參詣し何心ろなく其側らを通り過れば貞吾を
見懸て藥の無心に不便の者と思ひ我れを興へ坪井へ行て役人に云付宿ふ連行介抱せよと巾
付ふき八幡宮へ參詣せしに其村役ハ慳貪邪見の輩ふて我云付を背き理不盡ふも片山蔭の猪
小屋へ打捨指て歸りしを我ハそれとも氣つかず八幡宮へ參詣し下向の路坪井の村外れゝ來
りしに山陰ふて赤子の泣聲をるゆえ這は不思議と其聲を知る邊ふ尋ね行猪小屋の内を見れ

弾正の話しを
おすて後雖言
の念を起し
勢州餃子郡所住高村
義六妻貞

パ這ハ抑も甚麼ゐ其許の母か貞ハ無慙や胴かゝ一ッに斫殺されて居たゞと云れゐ拾ハ欺と許りに仰天なし其說話ハ眞實あるか母樣を殺しさるゝ何奴ふや名ハ知れて居ますかと心氣急燥て問ひければ彈正之ゐ慰をめ先ゝ跡を能聽べゑ其時胴切の切口より產れ出たるハ即ち其方「ヱ、ろりや妾しは其斫口より「サ夫ぢやふ依て嬲るのならん合點が行たか我其時悸き乍ら和娘を看て實に八幡宮のゐ授けならんと思ひて拾ひ上げ懷中にして連戻り此年月を育てしなり然ゑ九月十六日は伯母の忌日と精進をせ墓詣でなどをせつるが實は汝ぢの母ありける妙產大姉れ忌日なり此笈摺は后の紀念と持返りて保存置しが今ゑ其許ふ渡をべし母の遺物を大切にせよとて與ゆれパゐ捨ハ取上げ押戴きて熟ゝ詠め喚とばうりに泣沈みは此笈摺が母樣とハ曲がなハ切てゐ捨と只一言いふて聞せて下さりませと辭も涙に嗟嘆く笈摺顏に押當て泣叫びぬる有樣は他の見る目を哀れなり彈正想ひ忍びかね且らく歎息して居さりしが良ありて涙を拂ひ何程嘆愁とも詮なきこと死しさるものハ歸る由るし是ゞで踵り我ゝを實の親と思ふて居よといへパゐ捨は從容をあらた矣兩手を突て荅ふるやう是ゞで受し恩の程ハ海山にゑ譬へ難し生の親より命の親申ゑ上やうなきものを何しに粗畧に

存じませう去乍ら此笈摺に書してある勢州阿波曽村の父上ハ今も健康で坐たまふにや母さんが殺害られしを知てなりやと問返せば彈正頷づき成程笈摺にて國所も知れて居パ早速尋ねて遣は最易き事乍ゝ吾百日の立願にて漸ゝ得たる和娘をゑとり返さるゝことゆやと思愛の慾に迷ひ是迄ハ敢て便りもせざりしが最早和女も成人して星霜さへ經たりしゆゑ親子の名乘をさせんと思ひ三年前に飛脚を立彼地の狀態を聽せし處ろ汝が父ハ事故ありて六部となり廻國修行に出たる跡をハ貞が慕ひて又順禮となりて出たれパ嘉六が家ハ絶さりと村役人が談話しよし然るふ因て行方知れざる嘉六なれパ尋ね當んもあり難く只是のみが遺憾なりと件の始終物語れパ捨はまたも涙ふ咽び滅の母ゑは死別れてゐ說さへ知ぬ上況父親とハ生別れさて〳〵淺猿しき吾が身の談話し思へゑ〳〵母さまを殺した人こゝ恨矣しれ此上の孝行にハ當の敵を討とりて草葉の蔭のゑ無念を何卒晴ーて進たいと流石に元は武士の弓矢を執りし氣性を受け未だ年老ぬ身あがゝも復讐〳〵と呼て止ざり實にや蛇ゑ一寸ふして其氣を覺るとか敵を覘ふ志ろ爰に顯はれて殊勝ある詞あるを聽て彈正は猿て敵を尋る も何處の誰やら曾くれ知れず非除敵の知れたりとも未だ十歳の小娘ゞ及ぶぬこと成人そる

を待て後此彈正が後見して首尾よく復讐をさする程に忍び難き胸を鎮め暫ー堪耐て侍居よ然るあから素より後見して討そる積りの敵なれば今にも敵が知るゝ時ハ必らず思ひを晴させ遣らんと聞てお捨は溜息つき能々不運の母上かな敵が知れて居るあらば何如はや強き人たりとも屹度遁しハせぬものをと徐々ふ無念の心ろを增そ武士の胤こそ頼母ーけれ夫より後ゝ猶更ふ親にあゝねゝ親よりハ恩の深き彈正夫婦に能く孝行を尽し天性利發あれば彈正夫婦も大に悅び一方なゝず寵愛せり其後彈正は彼の病氣漸次に重り行廿日ばかりの内に殊の外なる大病と成けれとお捨ハ晝夜側を放れず甲斐々々しく看護したれと藥石針治の兆候なく次第ふ弱り玉の緒の切れる親子の緣因も今日か翌日かを限るふ見ゆれば猶々心ろを篤く用ひ只管傍へを離れずして今ハ只泣こがれ父上何卒能なつて飯をも食つて下されと泣るゝ娘の心中より泣ざる爰父の胸の闇拾ひし兒ながら實情ハ吾實子にイヤ優る猛き心ろの武士も愛女の行末を思ひやり重き首を擡げつゝ娘の顏を打詠め心の中に思ふやう今ま吾に別るゝハ欲々の不仕合悲しく思ふが道理至極便りと意ふ繼母の心ろは大方推したり吾なき跡ハ強面无くし情けをかけぬも知るべからず又十五歳にもなるならば劔術あとの警古をさ

せ助太刀をして亡母の敵を討せんと思しも今は消もく水の泡殘念ながゝ詮方なし是を思へば我命切て五年を延したし猶此上も弓矢八幡觀音菩薩娘が身に應護を加へて給れやと斷願なし跡々の事まで殘る方おく遺言して後四十三歳を一期となし冥途の首途おしたりけり然れば其妻とお捨ハ死体に抱付つき前后不覺に泣轉びしは余所の見る目ハ哀れありさて有るべきふとおらねど野邊の送りを營みて後念頃に吊らひけりお捨ハ三人の親に別れ今ハ繼母一人を賴ゝにます〳〵孝行を心ろふかけ至らぬこと迎無りけりさても彈正の妻ハ夫ふ別れ既に孀婦となりて一兩年を過せしが彈正が在世の頃とこと違ひ兎角にれ捨を憎ミ出し毎ふ優し兒詞葉もかけず年齒もゆかぬ小姐をば殘酷く扱かふにぞふ捨は哀しく憂中ふも實母の讎を討たさに武藝を心懸け繼母の機嫌をとりどりに只管警古を勵めば猶之を悪む繼母の情那のお捨めが年葉も行ぬに入ざる武藝の警古だて女の身として小癪にも敵ふ覘ふなそと の不敵さ成人爲后は家を拔出育て損を掛たる上返り討ふ成るハ必定剩へ妾わが身にを何樣な難儀咎の懸らふも知れず左れば此兒は家の仇永く便りふあらぬ女反て爰に措ならば此身も俱々流浪せん何卒がな彼女ふ難をつけ此家を追出し姪のれ鐵を呼迎へ我兒となして家

を讓らぱ親類中の氣受もよまと思ひ付さる心ろの事こそあれと巧ゞむ欺しもふ捨十三歳の秋を迎へて實母に貞が十三回忌の祥月命日に當り追善の爲ふとて繼母はれ捨を伴ひ萬松院へ墓詣で爲ぎんとして回向の施物を包みたる風呂敷の内の豫て其一ッを隠し供の者に持せ來りしゞ其施物の數を改たむる際一ッ足らぬと云出し此い不思議じや訝かしゝ今生で爰所に措さ施物が一ッ見へぬい合點往ぬ外に誰も來さ者無れば紛失する筈がないと座中を隈なく搜索し「ア、聞えさ是れ捨が帶平生纏を復たゝ本望が遂たいと言續けさから年も行ぬに敵を尋絲に出やうと思ひ旅の路用に爲やうと思ひ人目を忍んで好らぬみとを働らいたか物もあふふに歿母の供養の布施を竊取とはサア〳〵包を此處へ出ーやと聲荒立て言罵詈むお捨い呆れ「ア、母ぎまのあられもない妾とーたみとが何しに其樣な惡しい心ろを持ませう毫頭覺へは厶いませぬ萬一貴母のれ數へ違ひでいで坐りませぬか妾しい少まも知りませぬと言い愈〳〵立腹て盜賊猛〳〵しいとは和女のこと現在自身ふ取ながら空々ーいにも程がある能マア母を欺むいたゞドリア出させて見せうかどずつと立て一家ふいり引手もならく襖を開き戸棚の裡より取出い像ふ捨が所有する手函明て口惜き浦島が浦めしくも布施の

包、此内ふありれば見より吃驚胸轟ろきれ捨い夢更知らされどを何と言解術なくて言葉も出ず躊躇を繼母い包を突つけ是程盜んで措あがら能も母を欺かつて惜ひ奴め人でなしと胸倉取て引据ゑつ拳を堅め打叩き此人非人の畜生め繼、母の目穢を晴ま未て歟を尋ぬる旅費の用意生さぬ親子の中あれど此方に隔てる氣てないものを己れが心ろの繼子根生みとに他の金でいなし其身の母の年忌の布施物情けをそるを仇にて返をい有難いとて思はぬのかエ、ふの恩知らず見限り果さ業晒し向後親でない子であい何國へなりとを出て失う最早此家には一寸なりとも足踏するは許さぬゞと思ひきつて白眼るは恰ながら鬼神の如くにて謝罰間さへアラ悲しやれそてご着る小袖や帶を猶像もあらせず引ゐどき上着下着も古布ふ手早着せ替い古帶しめさせれ貞が遺物の笈摺掛きせ門より外へ突放ち泣き喚べど空耳いしらせ門の戸立きり内ふ入り嬲ふく風と聽流すい夫の慈善と反對なる豪惡非道の惡婦なり

第九章

幼女心ろを決して四方に廻國す
再び恩人を得て復讐の念愈切あり

墅ありと想ふ心ろの仇櫻夜半の嵐に誘はれて れ捨て杖とも柱とも恐みさる驛正に逝去れ便

りも今は渚こぐ片舟に漂よふ思ひしつ繼母大事と正實し〳〵事へたれども露用ひず邪智ふ富たる繼母も之斯る非道の難題言かれ吾身を外へ追出したるハ畢竟繼母が巧みの罠公明だて、詮儀すれバ知ぬとは在まい左ども日外や寺僧さまが仰せの詞ふ親は無理を謂ものゝ親〳〵さらぬと雖ども子々たらざるべからずと書物に載てあると仰しやつさが思ひ當はさ今の仕義と兒童乍らに十三の利發の天性胸ふ浮び大恩受た親のこと過り謝罰が專一と只管両の手を合せ母をも申し堪忍してと歎けど家來や下女供迄母の怒りを宥めんと俱々詫事なしたるも繼母は更ふ聞入ず未ゞ年輩も老ぬ身で盜ミする氣のある奴は成人なきば何樣な惡性者にならふも知ず彈正殿や此母の顏ふ泥ぬる不孝者武士の家にハ措き難ー和子等敢て詫するなら皆〳〵殘らず暇を遣ハそと取ても付れぬ有樣なるも名主の命ふは忤かれぬと家來共も悸恐れ二言と返す詞ばなけれども捨が形の淺間しきふ泣ぬ者ころなのりけれ捨ハ無實の難題に胸も張裂思ひしつ外表ふイずみ戸口より聲を放ちて泣ながら「ノウ此處明て内へ入て給ハれ母さま以后ハ決然改めますからふ免し被成て下さりませと呼べと嘆けど返答なく一重の垣ハ鐵金の無實を詫て七重八重待てど暮せど許なく空もく日脚とぶ鳥の飛鳥と川る身

の上を是非もなく〳〵思ひまはせば我身に少しの覺へなけを難癖つけて追いだす邪見無慈悲の母なれバ詫事ーて戻りても又恐ろしき謀計にて命を取る、事をやらんか敵を討ぬ其内は大切なる此體どうで一度ハふの家を出て敵を尋ぬる覺悟無實の名を受るハ心外なれども是より直ふ敵を尋糸に出て本望遂るが實母へ孝行幸ひ紀念の此笈摺思ひがけなき順禮姿冥途ふござる母上の打殘されし札所〳〵を廻りあば此上をあハ追善供養所々を回國する内ふハ親子の緣の尽されど實の父にも廻り逢ひ敵の所在も聞出し本望遂ることもあらん月日も多きうのなかに回國修行を思ひたつ今日ハ母上の十三回如何なる忌日か悲しきよ繼母が情けを知らぬ爲に住馴たる家を去り便る所ろもなき顏拭ひ若し實父が死ずして此世に厶るものならバ早く逢ひたひふ顏が見たいと流石丹令き娘心に口説つ泣つ笈摺を掛て此地を立放れ下着の布子を質却なー笠と柄杓と臥坐一枚草鞋脚伴に打扮つ順禮にご報謝と一錢二錢の報謝を乞ひ未だ十三の小姐が行方定めぬ旅の空辿り出るア哀れなる彈正が存生の内は傳ヒや乳母ふ侍づかれ遙間の風をへ厭ひまものが昨日に替る今日の身ハ家を追れてする業の旅金とてもあらされバ野に臥ては霜ふ浴れ谷ふ休憩ひて苦ふ席を又辻堂に夜を明し或時

ん軒下の露をかり藁の思ひ亂れて寐入りしを打叩かる、事も有り穿きも曾へぬ素草鞋に足を摺むくなど一人吟行ふ旅行衣着も馴ざる悲しさ忍び先四番よりして賢毋の殘したる札處〳〵を巡りつゝ大和國の初瀬寺へ行道をがら本多能登守殿の城下郡山の町々家々の店先に立寄りて幾度もまゐる心ハ初瀬寺山も皆ひも深き谷川順禮には報謝と慇懃に手の内乞てゞ歩行ける此處ハ京町の研屋藤助と呼ぶ家にて刀脇差の研を家業となす相應の身代なるが店ふい若ひ者を抱へ日々に刀を研を業となし其外には下男など都合十餘人ほど召仕ひけるが此藤助といふハ以前然る大名の家中なりしが若氣の情事慰ろめし同家中の人の娘なるお千代と割ゐき間とあゞ親のゆるさぬ鉢脊中しゞ〳〵忍ぶ人目の闇ゐえて逢夜の語ふひに飽ぬ別を捨かねて竟に古郷を落人の冬枯とさゐ立出つ去る年よゝ此處へ來り元來武士のことなれバ刀脇差を鑑定またりまた之を研の家業を嗣ぶきけり折節藤助が留守の處ろ彼のお捨ろの店先へイミ幾度も參る心ろは初瀬寺山も皆ひも深き谷川順禮ふ報謝といふ弊の愛らしく又哀れ氣に聞ゆるにゞ奥より女房のお千代が出來り見れバ漸々十二三足を留木の蕾の花咲かねど色香目づかち隙間に鳴る黄鳥の聲さへ涙のやつれある順禮姿を見れふ見る

ほど最可惜しき生まれ付き目鼻立ちから取り廻はしさへ賤やしからざる容子あるにゞ如何いふ身分の娘あるか世ふハあわれなるものもあるのなとふ千代と報謝を紙に包つみ差し出だしたる志ろざしをれすて大造有がたゞり押頂いて受け納さめ尚ほ唄ひ出すゞ詠歌の聲も一入しほらしく毎に回れる順禮とハ遙か違ひて愛らしさに懐かしき思ひやなしけん内儀ハ優ーゞ詞をかけ先々腰でもかけて休みて往ねゝテ國は何國年は幾つで名は何と尋ね定めし連衆もあるあらん問れてゞ捨は涙を潤ほし妾しの古郷ハ中國筋當年は十三歳名ゞ捨と申しまゞ又同行ハムりませんと聲うるまして落る涙を押かくし一体妾しが順禮するハ一人の願に逢たきまゝ、當途ハ何處と定めなく斯して探ねて居りまする「オ、夫はマア殊勝なこと同行もなくたゞ一人嘸や心細からうシテ尋ぬると云ふ親御どのゞ父さまか母さまか「アイ父さまを探ねるのでゞ坐りまするとゞ言ふ中ふ思ひ出せゝ母の件朋さへ今ハ塞がりて跡ハ涙に口籠りつ俯伏向けバふ千代ハ寄り添ひろんなら母上がないゆゑふ父さまを尋ぬるのかやゝレ〳〵夫は氣の毒な其居處ろハ今以て少まも知ぬ事あるか「アイ其父さまハ何國とも知ず仄かふ聞ゞ廻國修行ふ出しとの咄し若も親子の縁あらバ巡り逢ふ事もあらうかと夫バつか

りを娯しまに辛ひ旅路を我慢してと語る處ろへ主人は藤助歸りて來て此容子を見て女房を叱り是々滅多な者を此處へ留やるな此順禮等へ行ねど盜をするやら量られず見さ動靜でへ胡論な奴油斷するなと言懲せばお千代へ氣の毒なる面色にて是ゐちの人酷たらしいゐと云んすな此子が何樣お徒づらを爲る者ゐ事情も知らひで情けあいと言へる言葉を打消して藤助れ捨を見やりつゝ「イヤ〳〵然でない未だ氣が付まゝがゐれ此笈摺を看や勢州飯高郡阿波曾村農嘉六妻貞と記しありこれを見れば笈摺からして盜を物此女は漸〻十二三夫を持べき年にもあらず早々往よと叱りて付れをれ捨へ聞て涙を浮べ深き仔細の有磯海人と底意を知されば其疑ひへご道理此方と是ゆゑ顧慮すると劃ても見せたき赤心ろを言よゑもなき小娘は泣咽ぶのみ詮もなしれ千代へ夫の言ふ所ろ道理なれば成程夫もご尤も人の着て居る笈摺を貰ふて出る筈もゐし又捨ふて着やう譯もなく氣の毒ながら行なさゝと口を添て言れるにれ捨今へ是迄と涙を拂從容らため成程彼両人をまのれ疑ひはご尤是にへ深況酌のあることふ嘶し申せば永〻ともゐ疑ひ晴しの爲に篤りれ聞せ申し上んご迷惑ある事ながら盜人と言るゝ辛さをれ察し下をれ申上ぐる一通り能ゐれ聞下されと涙を止め胸を据へ語り出るへ元來

妾しの父と申は勢州飯高郡阿波曾村にて嘉六といふ農夫なるが事故あつて他國に修行し毋へ妾ーを胎内ゐ宿しながゐ其後を慕ひ西國順禮とありて一番二番を打仕舞三番と四番との間藤代の邊ふて虫がかぶり途中ふて腹痛み打伏ーて居たゞしを何者の所業とを知らず其二ツゐ斫殺し其盗奪て措たりしを不思議に姐は別條なく其切口より生れ出折から藤代の代官深井彈正と云ふ人が拾ひ上げ情深きれ方も名是まで育て下をれしが四年以前彈正さまは本去り給ひ夫よりへなさぬ中とて繼母が邪見の仕かゝ終に妾しへ追出され無實の罪を身に受て今へ流涙の憂艱難これも是非ない事あれど此笈摺は實の母の着て居ーを彈正さまのれ心ろにて紀念ありと取り措のれ大事にせよとて給へりしを斯て着て居る事なれば素より妾しに相應せず盜ミ物と見へたるへ毛頭も無理のゐい所ろ是を着て巡禮ずるは實の母や彈正をまの菩提の爲夫のミならず實父嘉六も六十六部に身をやつし廻國に出ゐれし由斯して歩行ものならば其内にへ巡ゞ逢ふ由もやあゐんと只一人の女子の旅心細さ悲しさをば推量して下をりませと事件の始終譚次ゞ照の袂を顔に押當かつぱと伏して泣沈めば藤助夫婦へ鵜たび驚き始めて知た此子の身の上疑ひへ晴たのみか前の過言知らぬことゝへ言作ら幼な

さものに年甲斐もなき惡口吐しと腹の裡に恥ぢひ原來和女い藤代のお代官の娘姐ありしか然とい知ず今の疑ひ何卒許して下されかし此頃まで蝶よ花よと育てられ荒き風ふも當られず手厚くされしふ身の上が繼母の憎しみを受けられて西も東も知ぬ身の十二や三で歩行既し一人旅とはれいたわーやと夫婦諸共手を添て草鞋を脱せ脚半を外し先兎も角も此家にて一兩日も休足なされ旅の勞れを保養て心ろを休め玉へよと洗足させつ衣類を着せ替のこる方あき夫婦の扱ひにれ捨は夢かと許り喜びて地獄で佛に逢ふたる心地否けあいやゝ嬉ーいやゝ思ひがけなき待遇ーに何と禮さへ言盡されず唯ゝ夫婦が言辭に從ひ此家ふもるる〳〵逗留なせるい是も一河の流れを酌み一樹の下ふ宿りたる他生の緣孝女を感ぜて神佛の斯る慈善の人に會合ーならんか然ればお捨は藤助方に逗留中尙委細ぎ譯を聞し實母の敵を討取た兇心ろ根を語りけるにゾ藤助愈ゝ賞ぜ元來己も武士の事もえいと憑もし〳〵思ひ感じ然あつてあろ眞の孝行者なれと大に其志ざしを褒ろやし何卒當の敵を討せて俱不戴天の念を晴させ今の思ひを遂させたしと自から力を添へけるが幸ひ此夫婦を子供なければ我子として後見なし彼が本意を達させんと夫より内ゝ劍術を敎へその道を傳ふるふお捨は利發の性なるゆえ一知十悟の才ありて只一心に出精せり又藤助は其後れ捨を同道て札所の靈場を廻り偏へに實父嘉六に波引することと猶仇人に出合ふとを祈りこの詮議ふ心ろを碎きしい世に慕母しき者と云ふ可し

第十章

姦賊酒に醉ふて舊惡を語る
仇敵ふ遭實父に遇て幡大也

隱れたるより顯いる、いなしとの古語理なるかな拔にれ捨が母れ貞を手に懸し彼の濃人大隅藏人なる橋本軍太い劍術の達人なればれ貞を殺してより四年を過き和州郡山の城主本多能登守殿へ三百石にて召抱へられ殿を始め一家中へ劍術の指南をふし居さりしが或日刀を研せんと藤助方へ來て研屋藤助とい此方なるのと供に問ハせけれバ店の手代出て頭づき藤助とは手前方なり先ゝれ上りなさるべしといふ聲を聞藤助走て出で見れば立派なる武士ふて面魂しい一癖あるべく見もるが若黨を召連れ訪來りさるにゾ先〳〵那處と奥の一間に通し是は能こそれ越下されました拙者が則ち藤助にムります自今れん目をかれ下さる可と平伏して禮を述夫お煙草盆お茶上よとあしらへも武士は横平ふ自分ことは大隅藏人と申者近年

郡山殿へ召抱へられ一家中へ劍道の指南を致し居れと亭主に逢ふは今始めて以后ハ用事を申付ん程ゑ研仕上等に隨分念を入よ扨今日研を申付んとて持參せし品ハ是なりとて若黨に持せ來りし刀を袋より取出して藤助に向ひ「此は急に研くれよと箱のまゝ差出せバ藤助長より奉りると請取て押頂きて前に置家内に言つけて盃盞を出させ酒肴吸物等侑めゑ捨を酌に出しければ藏人の軍太ハ我欲の果ありと何ゑ知るべき是ハで亭主其許の娘姐ゐるか大造奇麗き娘ぢやと愛相もれも藤助ハ難有いれ詞當年十三歳に成ますがいやはや不調法者で坐りまを別してで家中樣方ゑ出でのの節ハ給仕に差出しますが兎角ゑ侍士樣方を恐ろしく存じまして何事も不調法勝でござりまず隣分共ゑ麁相もあらばゑ赦し下さるべしと挨拶すると「何サ〳〵少しを大事なゑ身が方ゑも養女あれバ些屋敷へ遊びによゑしやれ何にせよ艶麗な娘ぢやと欲同士と知ざる身ハれ捨ゑ酌を執せつゝ數盃酒を傾け軍太ハ大に醉を發せり其時藤助受取し刀を取上て然らを拜見仕まつゝんで発下さるべしとキゝすら引拔鞘元より切先迄ためつすがめつ打詠め「ホゝ天晴のゑ道具込は見ずとも銘は來國光殊に鍔元に血痕見ゆるハ是ハゑ試し切有しにや無々見事に遊バしたでで坐ゑませうと正鵠をさゝれて軍太の藏人鼻うゑ笑かし「オゝ流石は老功の其方家業がらはゑありて作の鑑定とゑひ且は試ゑの血痕の見やう天晴賴母し成程見事に研さともこれを試しゐる咄しの一談夫を肴ゑして先一盃相手せよと酬す盃を受取ゑ「ハテ夫は面白ク事爲ん然らバれ相仕らんと請たる盃の酒呑干せバ軍太は甚だ得意顔にて馳走の酒の機嫌に任せ「是これゑ亭主其試したる咄しといふハ元來拙者は江州彦根の城主伊井掃部頭殿ゑ事へ一者なり然る所ろ聊かの義ゑて浪人いたし夫より當國藤代の近邊山田村へ流れこゝて住居しゝるが指を屈すれを十三年以前のゑと折しも暮秋の夜の長さに身の徒然を慰さめんと藤代の宿に出で一盃すごせゑ微薫氣元夜の更しも心ろにかけずして歸へる道の或猪小屋の内ゑ年の頃三十餘許りと見やる女順禮腹を痛め煩ひ居たるを見たるより某し數盃の醉紛れ能者にこそござんなれ此奴を殺し刀の切味を試さんと思ひ一刀両だん具二つに爲て退さりと微と顔ゑ嘶す傍ゑれ捨て藏人の顔見詰めて居たりしが原來母を殺害たるハ此奴なるか恨めゑや母の敵と胸張裂き齒を喰しばり眼を瞋らし膝立直ゑ震へながら摺寄て飛も懸らん勢ひなるを藤助早く見てとり「コリヤ〳〵急事いない短慮まひぞと言ふ言語を聞て軍太ハ不審ゑ想ひ伊亭主何を仰せらるゝ

又あの娘が景氣は何事ぞ其意を得ずと咎むれば藤助顏に笑を含ませ餘りに汚身樣が恐しい
れ斷をなされまする故最前も申上ます通りの不調法者あれば化物斷でも聽やうに恐い者見
たさに貴殿の れ側へ寄まするのでご坐りませう馬鹿な子だと呵ッ、笑ふ紛らせ言ければ藏
人實にもと思ひしか是も哂ひて打點頭き成ほど幼少の時と恐ろしい咄しと厭な譯なるが扱
て聞たがる者さて〳〵氣性の烈しひ娘じやこれ孃よ怖ひことれない面白い談話トや能聞よ
と言へぞお捨は藤助の指揮ふそれと察せしゆゑほんに面白いお說話でご坐ますンヲ其お
跡れ「ウムその跡の時に某ー酒機嫌に任せ此刀を拭ひて鞘に納めしに不思議やキャッと云
ふて泣出ーたれ慥かに赤子前から姙んで居たとれ見えさが能其赤子を斫らざりしとの物語
りにお捨は想難堪て藤助が側なる刀追取毋さまの敵遇しれせじと既に拔んとする所ろ藤
助手早く押止め是々お捨急事れ無と持たる刀を扱放して藏人に向ひ改さめて逃るやう幼少
の娘が只今の尾籠眞平お免し下をるべし偖娘が毋の敵と奬はりして嘸かしご不審に思し召
れんが之ふつき一通りお說話申されば譯ゾぬ次第がほ坐ますを抑々此娘れ拙者の娘でれあ
りません今れ咄しの十三年以前お手に懸られし女の死骸の切口より出生したる孕子なり是

迄養育しは藤代の代官深井彈正と云ふ人ありしが此人終に四年以前に此世を死去後れ繼母
の世帶とこ遂に落度をなさに追出され行吟ひ歩行を不便に存先頃より拙者が養娘に致置し
者もえ只今此座にて斯の仕合せ實れ私も及ず乍ら力を添へ何卒親の敵を討せて遣んと種々
に心ろを碎きし折柄思ひも寄ず今日只今自分と白狀なされしれ是寔に優曇花の咲たる時節
を待得たる心地あるべき幼少者なれど拙者後見仕つらんイザ立上つて尋常に勝負あれ是々
お捨支度致せと云けれど流石の軍太も仰天して積惡茲に後悔おし遺理てう最前より娘が風
態合點ゆかずと想ひしに成程一通りの咄しを聞ば尤も至極併し某しを敵と呼れる慥かな証
據有やと問ぞお捨其坐を立上り証據あきこと申すべき其品お目に掛べしと一ト間の裡より
彼笈摺と持來りて是見給へと差出せば軍太押ひろげつ讀下をふ何々順禮し奉まつる西國三
十三ケ所觀世音薩埵二世安樂の爲勢州飯高郡阿波曾村農嘉六妻貞と讀終りオ、滿足〳〵斯
慥かなる証據を見る上は吾も最早怯懦未練ふ逃躲れせね早速勝負れ承允せりされぞと我身
れ主人の体主君へ仕官の身の上なれば私しまれ成難ー依て是より立歸りて上へ巨細申上表
向にて勝負せん其元等よりも町奉行所へ屆け出よ立合時まで隨分劍法出精致せと云ふよど

藤助實にもと諾がひ其はゞ尤もの儀事あり表立ての勝負ハ猶更望む所と互ひに堅く約定して軍太ハそゝ〳〵よ歸宅しが夫よりして早速組頭の手を經て上へ申出ろの差圖を乞願ひぜる又藤助ハ捨と兩人ゑて町内の役人と打連立早速町奉行所へ出て始終を訴へ敵討せんと願ひけれゞ役人が差圖そるまでハ愼しみあるべしと言渡し町役人にも萬事宜ろゑくすてを介抱致し置べーと云付たり斯れゞ大隅藏人なる橋本軍太ハ敵討定日まで太田勝太夫安藤庫之助兩人へ預けとはなれり是萬一出奔るゝこともや有んと夫等の懸念ゑ由ものあり夫天道は非道を敵さずゑ捨が孝心を佛神も憐れみ玉ひけん不都なく多年捜索し敵人に巡り逢ひしを不思議の加護と悅び勇み藤助俱ゝ兩人ハ年來の本望を遂する時至りしとて自然勇氣を增したりけり然れば捨ハ斯ゝる事ゐりと知り玉とぬ父嘉六が居ゑなゝバ殘る思ひハ有まじ況に是のゑが殘念やと晝夜劍道長刀の警古ゑ一層出精〳〵て其當日を一時千秋の思ひして待不堪たり然拠に萬治二年十一月廿日町奉行所より此町内の役人同道にて藤助ゑ捨兩人を召連出べ況旨云越ば早速出頭せしに先達願出たる通り此度ハ捨ゑと大隅藏人と敵討の勝負仰付らるゝ定日て來る廿八日にて場所て町外れの河原を必得よ又藤助側ハ養女のことなれバ

れ捨後見の儀支障なゑ次ゑ町役人の者共は萬事ゑ心ろを添ゆべしと言渡されたれバ藤助れ捨ハ難有き旨ゑ請して我家に歸り彌〳〵劍術に精を凝し廿八日の來るをゞ待ゑける斯て町奉行の計ゑひとして郡山の町外れなる入口に高札を建さり其文言に云ふ來る廿八日勢州阿波曾村農嘉六娘當京町研屋藤助養女捨實母の敵當家中大隅藏人と橋本軍太と勝負申付者他と有此榜示出しより郡山の取沙汰はゑふゑ及ばず男女押なべて風評とりどりゑてアラめづらしや雖討といふことハ物の木か演劇ゑ見たるのみなるを今目前に活物を看るとハと其評判ゞ高かりれる爰ゑまゑ常右衛門なる嘉六て諸國を廻歷しかゞも妻のれ貞が殺害ゑれーは露知らず兒さへ無事に養育なし又幸助等が取もちして能婿にても迎へゑあらんなゞ折ゑ思ひ出でられしも又恩愛の情なるべしとの年十一月大和國へ差罹り初瀨寺の茶店に立寄休らひしが大勢茶屋ゑて噂すを聞バ來る廿八日は郡山の城下にて十三ゑなる娘が郡山の家中の大隅藏人といふ武士と敵討の勝負があるとて城下の入口に高札を建さり十三ゑある娘が敵を討とは世に珍しき事なりとて其評判大方ならず一大實ゑ吠へ萬犬盧を傳へ一人が云バ又一人此頃ハ何處へ行ても此沙汰許り噂見物の夥多とならん誠に世に珍らしき事とて通りがゝ

りハ勿論廻り路をしても見んと爲るゆよりそれが爲ゆ旅人が郡山へ入込思いぬ利得を爲るのハ歇店なりと居合す甲乙が聲高に咄し敢るを嘉六聞つけ其ハ近來珍らし兒事あから其娘は同ゆ家中の娘か又は町人の子にやと尋ぬれも然もなり高札の表にハ儘の元ハ伊勢國飯高郡阿波曾村嘉六と言者の子じやと書て有りたるやうあり去と談話を聞て嘉六と仰天なし胸先づ疑ろき考がへるゆ誠ゆ不思議なるは阿波曾村の嘉六とは吾を措て他にあるまじ何にもせよ合點の往ぬ事供なり大方人の謂違へあらん併し仮令間違にもせよ吾ゆも聊か覺え有る事ゆ爲樣子に因たら人敵上へ願ぬて助太刀せん固より急ぐ旅ゆ非す然なり〳〵と胸に問ひ腹に答へて茶屋を出廿二日の正午頃郡山へ着て高札を見るゆ這ハ如何ゆ人の言しに違は ず勢州阿波曾村農嘉六娘當時當所研屋藤助養女とあるに愈ゆ不審晴ざるのミか猶驚ろきたると相方の橋本軍太とあるなり彼ハ曩に伊井家を逐轉せし爲め同夥一同暇となり吾が斯成果たるも皆彼故なれば愈〳〵ゆ積る怨みゆ怨み吾妻を手ゆ掛しとか何は扨て置其研屋を尋訪樣子を聽が早手廻し併し此儘行ならハ敵方の廻し者とや疑がれん先町役人の方に越し仔細を聞んと其役人を尋ね主人に逢て此度當所にある讎討の高札につきて伺尋ね申し度と彼の

高札に嘉六娘とあり其嘉六ハ斯申も某しなり尤も某ハ妻が懷胎の内ゆもあるとて廻國修行ゆ出たれも胎内の兒の生れ出しも更に知ゆざり唯不審晴ざるハ何如事情よりして此ゆ立至りしにや某ゆが阿波曾村の農嘉六に相違あきハ此六部の往來印鑑を以て疑ひを晴されよと陳たるに名主磯と横手を拍偖ゆ是ハ奇あることなるかな貴殿の不審もるハ尤も千萬の事なりと先搔抓んで扨貞の最期ゆ捨が人となりし梗概を物語りけれハ始めて嘉六の迷ひ晴偖は左樣の成行ありしかと且驚き且呆れ復嬉し涙に暮けるが斯る例しのあるものにや是も日比祈請せる諸佛神の靈顯ならん思ひも寄ぬ娘に遭んとは實に忝なきと藤助殿片時も早く面會を遂げ尚我娘ゆも逢たれも迎もの序でゆ紹介して下さるまじきやと頼ミたれハ名主は最易きとと承允して早速研屋へ連なひ往ハ藤助夫婦ゆ面會ゆし前の事情を委細咄し則ち是へ同道せしといへハゆ捨を始め藤助夫婦も待あてがれし嘉六殿昨日までも今朝までも今遭いふとは知ざりし夢ではあいのと打悅び三人倶に出迎へ嘉六を見るよりゆ捨禮も述得ぜして側へ寄り互に計らぬ對面と先立ものハ涙にて何から言んと後や先胸一盃に塞がりて袖のみ濡ゑて居たりしかれ捨は嘉六に趨りつきゆ前が實の父さまゆ「オヽ我こそ名主殿の咄し

と通り其方が父嘉六なれ段々説話せば長いあと追れ難き仔細ありて六部となり廻り〳〵て斯無事に親子が顔を對すといふも偏へに此家の浪夫婦のお情なり何時の世にかゝ此御恩を報ふべきお禮と言詞ふ尽されずと言乍ら又れ捨を見て早速其方に尋ねたきゝ母は敢あく非業に果しも其方と不思議に命助かり十三年の年月を如何なる人に育てられ今日と云今日はまた復讐するといふ事の始終語りて聞すべきと云れてお捨と心ろ就め是迄の次第を落あく語りければ常右衛門聽て驚ろき今斯迷ひに逢見る事を得らるゝ彈正殿や藤助殿御夫婦の情ありア、能も成人して呉た此成人を見るゆッケ思ひ出すゝお貞のこと貽に孕せし子なれども一目も見ずに死したるは嘸や殘念無念ならん然ど今成人して復讐するを知るものならば草葉の陰にて嬉〳〵く思ゝんとお捨の手を握泣人ば側への人さへ袖を絞りて而てを殺てぬ者ぞあき良有てお捨ゝ猶種々の艱難なせし件りを談せば嘉六も今迄の談話をなし藤助ゝ又仇の知れたるより始め上へ願ひを出し晴ケ間しき勝負となり其身が後見を許されー始末等語りければ常右衛門其志しと計ひを感じよ〻年來祈りし神佛の利生ふて能き時に出會大慶至極身の本望是ふ過たることあらじ一ふゝ奉行の意を配られしと彼の高礼ありて捨幼少

なるものから助太力の者もやとの賢慮より榜示を出し評判を四方へ傳へ竟に我身が會合ひ去も是が爲なりと其天晴なるを稱し次に敵軍太ゝ舊倶〻伊井家に事へしに彼が放蕩よりして同僚一同永の暇となり怨みゐる上ゝ妻の仇なれば上へ願ひて助太刀爲さんと語るを聞て藤助夫婦は廻ひと逢たる小車の不思議を只管悲き喜びて嘉六を伴ひ町役人同道ーて町奉行所へ助太刀ゐーたき由を願出れば思ひ通りに許されけり偖お捨ゝ日柄迫りたるゆへ日夜武藝を出精し敵討の用意怠らず仮令少年なりと雖ども此助太刀此後如何ぞ什生に非道の橋本軍太も今ぞ武運の尽る時積惡の報ひ恐るべし

第十一章　仇討場所成て威儀整然たり　幼女敵に對つて諸人肝を寒からしむ

惡盛ふして天に勝天定つて人を罰を既に研屋藤助より敵討の事を願ひ出るや早速郡山の城主本多能登守より伊勢國阿濃津の城主藤堂和泉守へ宛使者を以て云遣はされけるは浪領地内飯高郡阿波曾村農嘉六娘捨儀母の敵大隅藏人と申す者と仇討の勝負を當領内に於て申付たりとなゝしかも藤堂家よりも使者として同名監物廿六日に郡山へ到着しぬ斯て廿八日も

間近きにあり仇討の場所へ城下町外れの河原にて七十間四方ふ竹矢來を結東西ふ棧敷をしつらへ南北に櫓を上げ矢來の内にハ砂を敷勝負の場所を擇へたり時維萬治二年十一月廿八日なり豫て此沙汰近國他國に隱れおかりき折節此日晴天ふして待設けたる人々ハ未明より貴賤老若引もきらず走來りて群集すれバさしもふ廣き河原中も錐を立るの地を剩さずなりぬさて矢來の内一段高き棧敷にハ郡山の城主本多能登守殿金屏風に紫きの幕を打廻し毛氈を布て緋純子の野袴に猩々緋の陣羽織を着し軍配を以て着坐せり近習の士五十人左右に隨ひ西の方一段高き所に藤堂家の名代監物殿同じく金屏風ふ紫の幕を打せ茶純子の野袴ふ黄羅紗の陣羽織を着し金の軍配を以て着座せり近習の士三十人ふの左右に列坐す南の方にハ本多家の家老用人大目付組頭小姓頭其外諸役人家々の紋付さる幕を打廻し思ひ〳〵の裝束にて魏々堂々と居並び北の方は家中諸士及び出役の面々着坐したり又東ある棧敷前にハ當勝負の目附役片山主膳銀ハ采配を携て床机に懸りたるは實嚴格さ光景なり猶北の櫓は大島清六太鼓を預ゑ南の櫓は和田善平半鐘を務め三寶は小笠原善一郎銚子は山中平内水桶を南北に居矢來の内外四隅にハ物頭四人足輕八十人に棒を突せ其外同心より下々まで役向を振

分け嚴重に警固したるは美々しくもまた勇ましゝ其晴あるを稱へぬ者ゐうなのりけれ隙て大隅藏人なる橋本軍太に言渡して仕太刀は幼少といひ且女の事なれも仮令其方の親類兄弟たりとを助太刀ハ決して叶ふべからずとなり時恰も己の上刻南の櫓より陣鐘三点を打出せバ碩や始まるぞと滿々たる群集の見物我前に出んと押合へし合棧敷も矢來外も一同れ捨の方に目を着て詠ゑ詰さる時こそあれ先一番に橋本軍太南の口より矢來に入れり其衣裝を見れば黒木綿なる廣袖の綿入に紫縮緬の丸縫を帶にしめ二尺八寸ありける來國光を貫の木差に帶し刀は都て朱鞘銀の胴がね作なれも遲りも煙やくバかりにて悠々と出來りたる面魂ひ脊高く骨太く眼鋭く色飽まで黒くして顔色苦交りたるは實ふ一物有るべしとは云ねども知れたる人体よて怯ず臆せず圓坐の上にどつかと坐せり二番ふ北の櫓太鼓三を合圖ふ北口より入るふ捨の打扮ハ白羽二重の無垢に白綾の帶白練の鉢巻して白縮緬の玉襷を綾どり緋縮緬の肌着緋純子の小手脚伴を手足ふつけ桃色の背筋入たる笈摺ふ州飯高郡阿波曾村嘉六娘捨生年十三年と記しさるを羽織り見も愛しき小姐ふて天性の美貌なる上に一層艶を含みたる順禮姿心ろふ觀音を念じつゝ一尺九寸の短刀を帶し白柄の長刀抱込靜々之も圓

坐に坐せり次ぎ常右衛門の嘉六と木綿の白無垢小手脚伴等總て白裝束穂先六寸柄六尺の手捧と見たる手鉾を携へ袂の裡に手裏劍を用意せと後見藤助は町人姿の黒出立二尺三寸ある具鎗胴金作の脇差を帶刀一同入場すればお捨獄人ふ配膳を給へり兩人の衣類を改めらるゝに藏人へ鎖帷子を着たるより萬人の前に恥を晒しこれを脱せらる爰に銚子土器等の儀式終と目付片山主膳太鼓を合圖に打懸り半鐘を以て引別れ何度にても休足して神妙ふ勝負を決せべしと云渡をるゝ間も無合圖の鼓聲に双方共立上れり此時までも器々たりし數多の見物水を撒る如くにて鳴を鎭め唾液を呑で見詰たりお捨へ薙刀小脇に抱込み徐々に進み出で聲高らかふ言けるへ何如樫本軍太殿十三年以前九月十六日順禮の札所廻りを當國坪井の渚小屋にて殺害しを豈夫忘れへ致さるまじこれみろ自の母なりけれ妾が小腕お相手には不足なるんがイザ勝負ゐれよと陳れば軍太嘲笑ひ神妙ある志念然ども勝負を望むかゝ幼少なりとて用捨はせぬイザと許とふ彼の國光を拔放てもおすても觀念と言樣に白柄の長刀打振〳〵薙てかゝるを藏人太刀具甲に指翳し無二無三に切立々々表八手裏八手陰に圍み陽に開き火花を散らして双方が千變萬化に戰ふ有樣武器へ互ひふ異あれども思ひ設けぬお捨が働き

見る人肝を冷しけり元來軍太は劍術手練の者なれば踏みみ〳〵打太刀銳く然ども お捨は年來の思ひを爰に達せんと一心に佛力を賴て危ふき所ろを凌ぎ爭ふふ藏人の勢ひ益々劇えくお捨對戰兼て見へたりしかも數多の見物手に汗握り何れも危ぶむ折ころあれ不思議にお捨の腕筋直り漸々ふ若り立軍太いまは防ぎ兼負色を現へしれども見物漸く安堵なし一度ふ喝采聲を揚たり誠ふお捨は十三年敵藏人ふ敵ふ可も非ず是神佛の加護と一心を劍道ふ凝たるに由か双方既ふ薄傷を負へば檜に報ずる引鐘合圖に足輕六人割て入先兩人を休憩さり

第十二章

復讎既に遂げて領主之れを賞そ
兩人恩遇を辭して身浮屠に歸す

邪へ以て正ふ勝ず惡必ふず善を制す可らずとへ宜なる哉斯て程なく二番太鼓を打鳴せば復立合を始めけり初め軍太へ那の小娘只一討と思ひきや長刀の早業に大ふ恐れ息を入たる後なれども尙樣々秘術を尽せばお捨も又妙手をあらへし互ひふ爭ふ其形勢目覺敷も最劇しく半時程討合たれど更に勝負果ざれば嘉六助太刀せんと身搏そるをお捨押止め最早勝負は見たりと云ふ言詞の下より手裏劍二本嘉六がすつと撃込ば狙ひ過たずして藏人の眼ふ蚤止と立

かしこよあだ
者者女後雖言ども
たち
果して領主の
やうりう
感賞にあふ
くわんしやう

黒血流れて目ゐ入るを得たりとゐ捨が拂ひたる薙刀の尖先軍太が下腹より助骨へかれて切上れば何かゝ以て堪る可うんとばかりに轉倒たりゐ捨ゝ薙刀かなぐり捨小脇差を引拔て先両の手を斫落し大音聲ゐて冥途の母さま悦び玉へ仇軍太を討取たり十三年の間の修羅の無念を晴させ玉へと左の手ゐ髻を握り右ゐ脇差逆手ゐ持首搔落し年來の本望遂て嬉しやと呼はる聲に機敵も下も四方八方皆一同譽る聲々鳴りを止ず其時嘉六懐中よりゐ貞の位牌を出し芝の眞中に之を据措きゐ捨ゝ紀念の笈摺を位牌にかけ其前に軍太の首を手向摺火打にて線香を瞞じ父子藤助三人の燒香終り嘉六まゝ餌を叩て回向の念佛に稱号唱へれば見る老若男女涙を注がぬゝなかりけり此時目付役片山主膳が町奉行近藤眞琴之助を呼で云けるゝ嘉六親子幷びに藤助は一ト先會所へ引取らせ休足の后大切ゐ取扱ふべしと申渡し復讐の件ゝ茲に首尾よく濟たれば目代を始め能登守其外諸士の面々殘ゐず引取り跡よりゐ捨親女藤助ゐ諸役人を警固として付添引取らせらるゝに見物の群集はれ捨が孝心且今日の手柄を褒そやし數千の人々が跡に隨ひ附添ひたるは後世までも云傳ゝる孝女の譽れと知れゝり然程に其後れ捨等三人の者へ領主より種々叮嚀を尽されゝる馳走仰付られ其上郡山の家中大身

の人よりゐ捨を嫁ゐなし度と云出たるも多かれど藤堂家ゐて三人を伊勢へ召連度と云れしかゝ其事ゐ定り本多家に於てゝ霜月尽日三人を城内ゐ召し褒美の詞を下され親子へ金二百兩つゝを賞され又藤助ゝ捨女を養女とおして憐愍を加へ本望を遂ぎせしは武士同様の心底他國への聞ゐともなれば知行を與へて家來とあるべきゐ覺召なる所ろ藤堂家に於てゐ望み有ゐへ同家に差遣し褒美として金三百両を賞さるゝとあり偖三人は藤堂家目代藤堂監物ゐ伴あれ翌月五日伊勢へ到れゝ藤堂和泉守侯早速三人に目見申付け嘉六親子には新知二百石を以て武士に取立んと仰せ渡さるゝゐ嘉六謹しんで道は冥加至極身に剩りゝる仰にゝ侯へ共拙者ことは故あつて廻國修行者の境界ゐ入りたれば猶また此度の罪障消滅の爲矢是より西國筋を遍歴仕つりたし次に娘捨義を仮令母の敵なればとて歴々たる一個の士を討滅せしゝ其罪輕きに非ず因て是ゝ母幷ゐ軍太の菩提を吊らゝん爲尼となるべし以上の次第ゆゑ武家にゐ取立の義ゝ偏へにゐ免しを願ひ奉ると陳るゝ和泉守も益々其意を感激あられたりまた藤助ゝ薄命を勤わりゐすてを深切に世話なしゝ段感腹の至其心底を以て末永く事ゐべしと有て新知二百石に取立られゐ召抱へあるべき旨を申し渡されたり抑も藤助ゝ元來武

士なりしが若氣の過りより親ふ離れ町人に姿を替しも眞心ろの致す所ろ天感能あり て稍善の餘慶身に報ひ再び咲く花の武士ふ千代も悅び之を以て鄕里の親へも永らく絶し者信出來夫婦俱々主家へ忠勤を尽しけるとそ然ハ嘉六ふ捨の兩人ハ藤堂家へふ暇を告げ久々にて阿波曾村へ來り村中の人々ふ會先年世話ふなりしを厚く謝菩提所へ行先に金を送りて建立を乞たる常念佛堂に逗留して名主幸助を始め組頭等へ先般の禮を表する迄と大振舞の宴ふ開きふ捨を引合廻國中の談話あどをし嘉六の名跡を改めて村に立先祖持傳へ丈の田畑を調へされば其志ろざしを村人等稱へあへ是非永く本村に杖を留給へよと親女の袖を引止しも固く辭み遂に別れを告げ親女は是より一層出家して菩提を營まんと妙顯寺に至り日豐上人に事へ髮縮して嘉六は元政と名号ふ捨ハ妙運と名乘り蕾の花て墨染の衣姿の尼法師着勤供養ふ餘念なし猶元政妙運ハ緇衣を纏て藤代の菩提所ヲ松院ふ打越へ彈正ふ貞の墓に詣で石塔を建供養法事を營み永代の回向料まで寄進しけるとゐん去からに深井彈正の妻ハ幼科もなき幼姐を無理遣に追出し己れが心ろの儘姪ふ鐵を養女となし聟を迎へけるが此度國ちずをおすてが嫌を復しふ其名頓かふ高くなりしに不郡の後家ハ邪智者なり孝女のふ捨を

追出して深井殿の名を汚したと世間の者よ指さゝれ痛く面皮を失ひたるハ積惡の報と言ふべきか其後九年を經元政ハ寛文八年二月十八日行年四十六歳ふて寂し妙運ハ夫より廿五年の後元祿六年八月十六日年三十三歳にして陰司の迎へを蒙しと云ふ

因に曰ふ元政律師ハ持律嚴整の高僧にして諸藝ふ秀で當時其名に風靡せざるなく皆如來の化身と云ふ又明の歸化人陳元賢本朝の碩儒熊澤了介と方外の交りありしと世に傳ふ扶桑隱逸傳如來秘藏錄釋氏廿四孝釋門孝傳本朝法華傳身延山七面傳溫泉遊艸食醫要論等ハ其著はを所なり

阿波曾村を出て
大隅藏人　大和郡山讐討終

版權登録

大和郡山
明治廿一年九月十六日　印刷
同　年同月十九日　出版

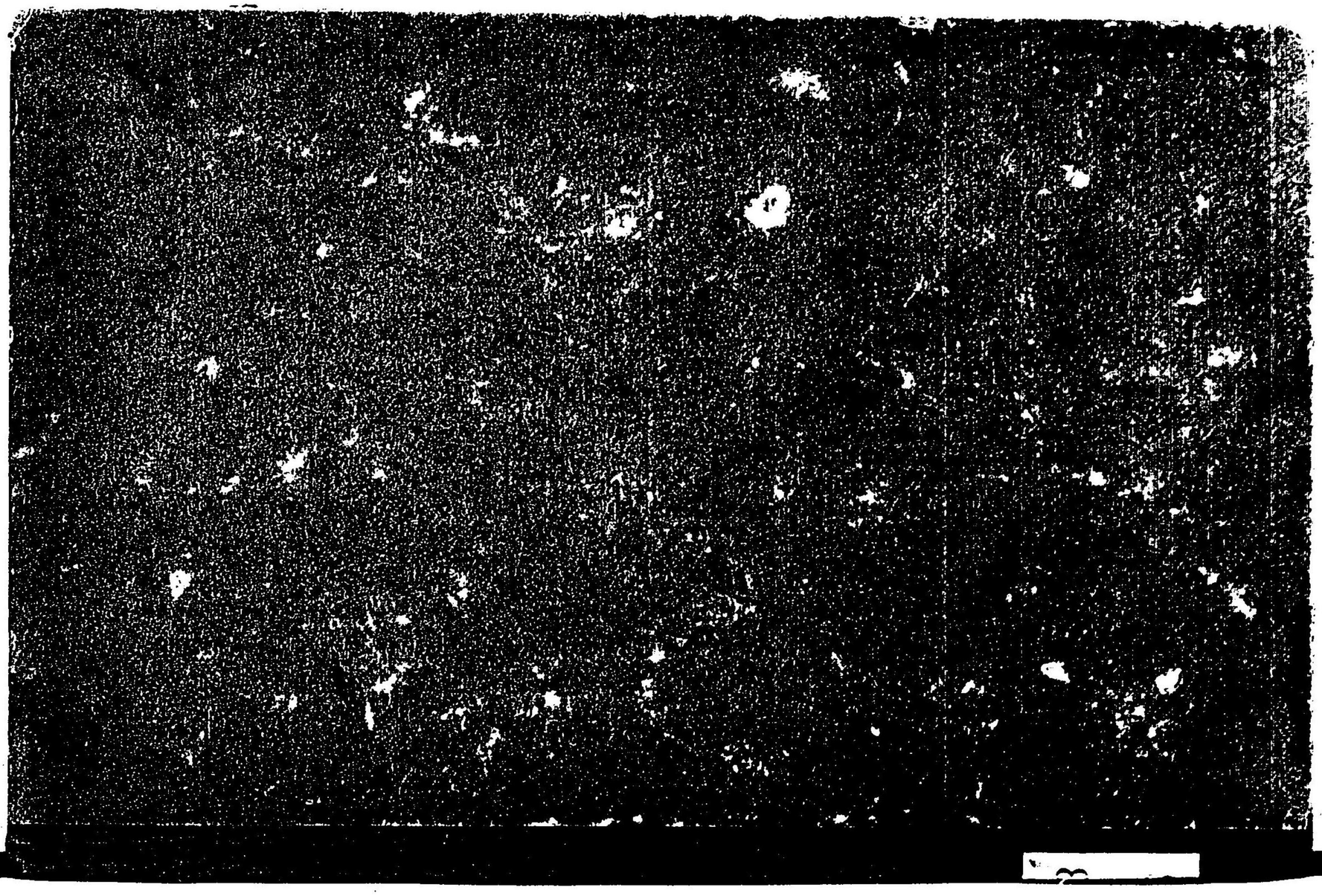
定價金十五錢

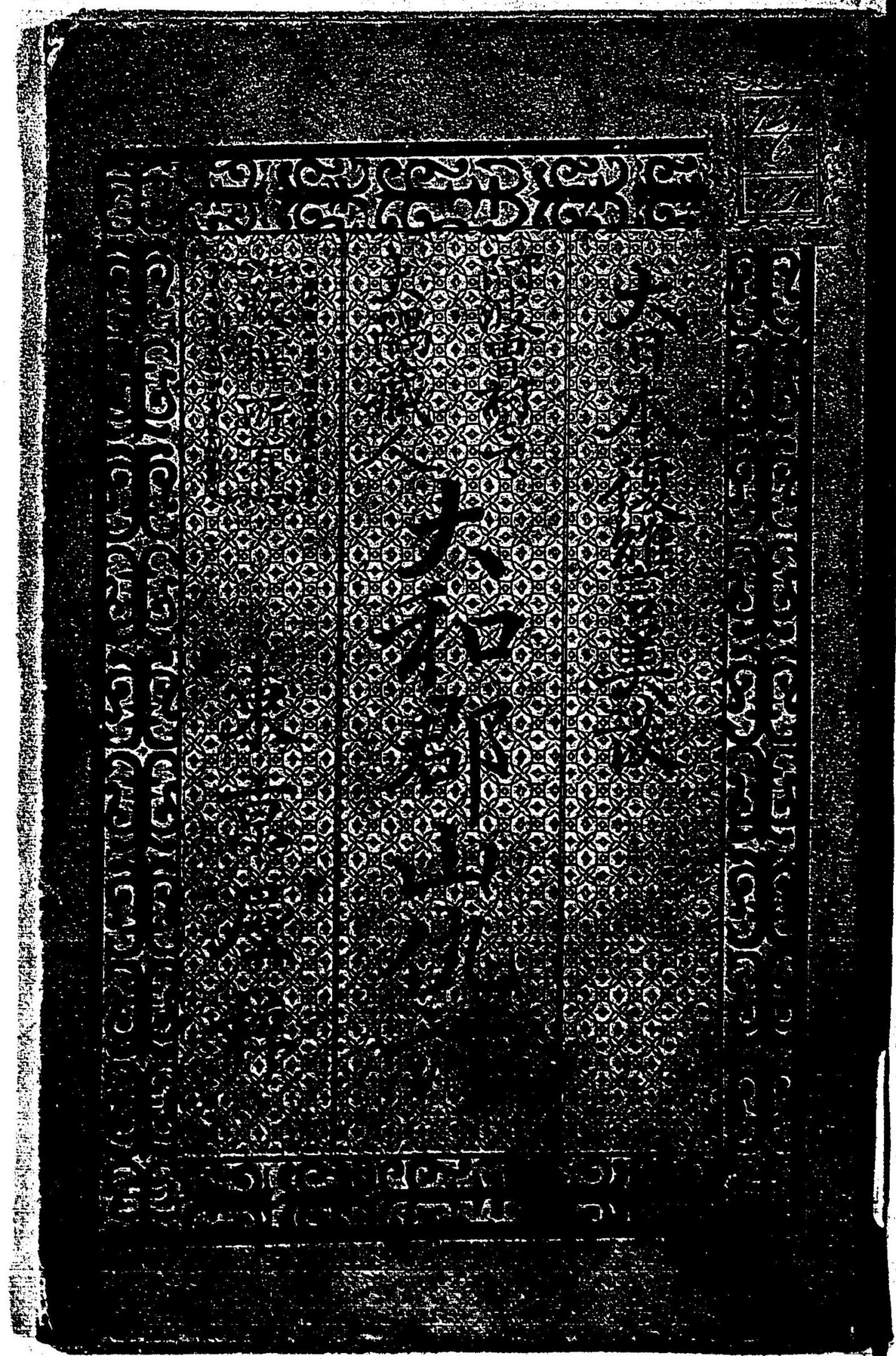
東京府平民
編輯兼發行者　森　仙吉
日本橋區緞町四丁目十一番地

東京府平民
印刷者　永井錢之丞
小石川區掃除町卅三番地寄留

版權所有

大販賣所
東京日本橋區檜町四丁目十一番地
發　兌　東京屋鶴聲社





091507-000-7

特13-298

大和郡山讐討

森　仙吉／刊

M21

DBN-2477